大谷大学真宗総合研究所

研究所報

No.77　　2021. 3. 1.

目次

距離を生かす　1
2019(令和元)年度「指定研究」等研究経過報告　2
2020(令和2)年度「指定・一般研究」研究組織一覧(追加)　8
2019(令和元)年度「一般研究」研究成果概要　9
2019(令和元)年度東京分室 PD 研究個人研究成果報告　31
2020(令和元)年度東京分室 PD 研究個人研究紹介　34
公開講演会・公開研究会　35
彙報　36

距離を生かす

東京分室室長　井黒　忍

ソーシャルディスタンス、三密、オンライン会議など、もはや耳なじみの言葉となったが、新型コロナウィルス感染症のパンデミックという危機のただ中にある今ほど、様々な「距離」を意識することはなかったかもしれない。東京分室は本来、京都から離れた東京という新たな場における研究活動の拠点として設置された。したがって、距離が生み出す問題点をいかに克服するか、さらにはこの距離をいかに生かしていくのかという問題に答えることは、設置当初から分室に課せられた使命であったとも言えよう。

2019 年 4 月よりメンバーを一新する形で東京分室の研究活動が開始された。新たに着任した PD 研究員は、それぞれ真宗学、宗教学・近代仏教文学、生命倫理学、フランス文学を専門とし、歴史学を専門とする私を加えた計 5 名による共同研究のテーマとして、「宗教と社会の関係をめぐる総合的研究－社会的価値における宗教の役割の解明－」を選択した。もともと、もともと、異なる研究分野に属する PD 研究員が、それぞれの専門性を生かしつつ共同研究を組織するという形は、その他の指定研究が特定のテーマを前提として研究組織を構成するのと完全に異なるものであり、その難しさは当初の共同研究のテーマ選びの段階ですでに明らかであった。

共同研究、特に学際的研究の成否を分ける鍵の一つに、メンバー間の心理的・物理的な距離が挙げられる。このうち、物理的距離に関しては、東京分室は恵まれた環境にあると言える。机を並べて研究を行うという環境自体が大きな意味を持つのである。日常的な会話の中から生み出される、一見たわいもないやり取りを通して、自分が常識だと思っていたことが相手には新鮮な発見であり、他のメンバーが共通の話題としていることを自分だけは知らずにいたたまれない思いをする。これこそが他分野との協働を実現し、新たな問題関心を掘り起こすきっかけとなるのである。

また、メンバーそれぞれの個人研究と共同研究の距離も問題となる。個人研究をベースに集まったメンバーが共同研究を作り上げていくのはまさに至難の業である。それぞれが個人研究を推進しつつ、共同研究にも貢献していく方法をまさに一から模索してきた 2 年間であった。もちろん、人によりこの距離には違いがあり、個人研究を進めることがそのまま共同研究に貢献することになる者もいれば、個人研究から若干離れるかたちで共同研究への関わりを模索する者もいた。私自身も後者に属するだろう。

これは他分野の研究に対する関心と寄り添いという問題とも関わる。自身の関心の中から生み出されてきた課題をそれまでに習得してきた方法論を用いて明らかにするという手順は、まさしく一つの分野における「正統」なものであろう。しかし、これに安住することによって生じる研究分野の細分化は、研究者自身のみならず、日本の学術全体をむしばむ深刻な問題となっている。自身の関心の幅を広げつつ、研究対象との距離を縮めるには、知的好奇心に加え、社会的問題に対する関心と責任が鍵となる。まさに学術研究の基礎とも言うべきこれらの資質こそ、東京分室の共同研究によって養われるべきものであり、研究員たちは十分にその期待に応えてくれたと考える。

2020 年 10 月に開催した女性と仏教に関するシンポジウムでは、コロナ禍の状況のもとでオンラインの開催を余儀なくされたが、参加登録者は 120 名を越え、日本全国から研究者のみならず、一般の方々にも多数参加頂き、成功裏に終えることができた。結果的には、物理的距離を容易に超えることができるオンライン会議の仕組みは、少人数かつ東京に「独立」する東京分室の成果発信の方法として、見事にマッチしたと言えよう。今後も研究員のモチベーションの向上と問題関心の広がり、専門性の追求によって、その可能性はさらに広がり行くと確信している。すでに発信はなされつつある。ボールは受信者の側に渡されているのである。今後、研究者としての資質を問われるべきはこちらの側なのではないだろうか。

2019（令和元）年度「指定研究」等研究経過報告

新しい時代における寺院のあり方研究

現代社会と寺院の抱える問題点の分析、およびそこでの寺院の果し得る役割についての研究

研究代表者・学長　木越 康
（真宗学）

本研究は、人口減少や地域構成員相互における関係性の稀薄化等の深刻な問題を抱える現代の地域社会において、寺院の果たし得る役割を研究し、その成果を公開しようとするものである。

3か年計画の最終年にあたる2019年度は、過去2年間と同様に地域調査を継続的に進めるとともに、これまでの調査・研究を通じて明らかになってきた課題や成果を公表していくことが活動の中心となった。調査に関しては、他出子（他出門徒、離郷門徒）と地域・寺院との関わりについての聞き取り調査とともに、葬送儀礼および墓地墓制に関する聞き取り調査を行うことができた。前者は、『研究所報』No.75「国内調査報告」としてその概要を既に報告しており、また後者については『真宗総合研究所研究紀要』第37号に「地域社会における真宗寺院の現状と課題－岐阜県旧春日村の墓制と葬儀の変遷を通して－」（本林靖久、磯部美紀）という論文としてその成果を公表している。

上記の取り組みに加え、2019年度は10月20日に札幌市で開催された「大谷大学フェア（北海道）」において、本研究班の研究員がパネリストおよびコーディネーターをつとめ、当該問題に取り組む学外の方（2名）とともに公開シンポジウムを行うことができた。「人口減少社会の現在と次世代の育成－地域と寺院の視点から－」と題したこのシンポジウムを通じて、多くの方々との交流と課題の共有、問題関心の発信ができたと考えている。

さらに2019年度は研究班にとって最終年度に当たるため、3年間に亘り調査に協力いただいた岐阜県揖斐郡揖斐川町春日地区の寺院が所属する真宗大谷派大垣教区の教務所（大垣市）において、現地報告会「揖斐川町春日地区における「地域と寺院」調査研究報告会」を2020年2月27日に開催した。研究班の成果と今後に向けての課題を共有する機会をもつことができたと考えている。

当該研究班は「特定研究班」としての活動を2019年度で終えてはいるが、今後もいよいよ状況が深刻化し、それに伴って重要性も増すと思われる当該研究課題への取り組みを継続していくべき必要性を最後に明記して、本研究経過報告を結ぶこととしたい。

国際仏教研究

諸外国における仏教研究の動向の把握と資料の収集・整理・公開

研究代表者・教授　井上 尚実
（真宗学）

本研究は、諸外国における仏教を中心とした宗教研究の動向を把握するとともに、国際社会に対して本学の真宗・仏教研究を公開することを目的としている。2019年度は英米班、東アジア班の二班の体制で研究を進め、それぞれ下記のような研究テーマで活動している。

〈研究テーマ〉

①英米班：真宗を中心とした仏教研究動向を把握し、真宗関連資料の翻訳出版、欧米の研究者・研究機関との共同研究を立案・推進する。

②東アジア班：中国華北・東北・東部モンゴル地域の宗教と文化の研究、中国社会科学院歴史研究所との共同研究を行う。

活動内容

〈英米班〉

①国際学会への参加

1）国際真宗学会（IASBS）第19回学術大会におけるパネルおよび個人発表

2019年5月24日㈮～5月26日㈰に台湾の法鼓文理学院にて開催された大会において、加来雄之研究員がコーディネーターを勤め、学外の研究者を3名招聘し、「グローバル社会における親鸞思想の伝播の課題と可能性」という題でパネル発表を行った。

①「親鸞思想と中国仏教との出会い」
陳敏齡（CHEN Minlin　輔仁大學宗教學系兼任教授）

②「自然法爾について」
張偉（ZHANG Wei　同朋大学教授）

③「『教行信証』の英訳の限界と英文注釈書作成の必要性について」

マイケル・コンウェイ（Michael CONWAY　研究員）

④「親鸞伝のポテンシャル：宗教間対話の事例と文化間対話の可能性」

マルクス・リュウシュ（Markus RUESCH　龍谷大学　日本学術振興会外国人特別研究員）

2)「日本におけるサンスクリット語とヒンズー教の神々」国際セミナーにおける発表

2020 年 3 月 3 日から 8 日にインド・ニューデリーのインド国際センターにて開催される国際セミナーにおいてショバ・ダッシュ研究員が参加し発表が予定されていたが、コロナウイルス感染拡大のために渡航がかなわず、参加できなかった。

②国際シンポジウム開催

「Women in Buddhism: Problems and Prospects」（女性と仏教－課題と展望）シンポジウム開催

2019 年 10 月 11 日㈮10 時半から 17 時まで響流館 3 回メディア演習室にて以下の二名を招聘してシンポジウムを開催した。

①「真宗寺院における女性の役割」望月慶子（真宗大谷派宗議会議員）

②「Leading to Liberation and New Horizons through Networking: Buddhist Women & Bridging Worlds」（ネットワーク作りによって新しい地平と解放へ導く－仏教徒の女性と世界の橋渡し）Christie Chang（CIEE, National Chengchi University, Taipei）

③「革新としての伝統－欧米における比丘尼僧伽－」Ute Hüsken（Department of Cultural and Religious History of South Asia, South Asia Institute, ハイデンベルク大学）交通事故のため来日ができず、送られてきた資料を代読する形での発表がなされた。

③真宗関係の翻訳研究

『歎異抄』翻訳研究プロジェクト

大谷大学真宗総合研究所とカリフォルニア大学バークレー校東アジア研究所および龍谷大学世界仏教文化研究センターの三機関による協定が締結され、合同で『歎異抄』およびそれに関連する近世近代の文献（講録等）を英訳研究するプロジェクトが立ち上り、年 2 回（3 月にバークレー、6 月に京都で 1 回ずつ）合同ワークショップを開催し、最終的に 2 冊の研究書（注釈付き本文英訳＋研究論文集）出版を目標とする。その第 6 回ワークショップが 2019 年 6 月 21 日㈮から 23 日㈰に本学で開催された。新型コロナウィルスの影響により第 7 回は 2019 年 3 月 6 日㈮から 7 日㈯という短縮した日程でバークレー市の浄土真宗センターでカリフォルニア大学バークレー校の主催で開催された。前者のワークショップには研究員および大学院生が参加したが、後者にはコンウェイ研究員のみを派遣した。

④国際シンポジウムの成果出版

1）真宗近代教学アンソロジー *Cultivating Spirituality* 出版記念シンポジウムの成果出版

2015 年 6 月 26 日㈮27 日㈯の 2 日間、大谷大学で *Cultivating Spirituality* 出版（SUNY, 2011）を記念して開催されたシンポジウムの成果を、マーク・L・ブラム教授（嘱託研究員）とマイケル・コンウェイ研究員の共同編集により欧米の大学出版から出版する予定で編集作業を進めた。具体的にコンウェイ研究員とウェイン横山職滝研究員が定期的に真宗総合研究所内で編集作業に取り組み、8 月 1 日㈭から 7 日㈬までブラム教授を招聘し、三人で編集作業を進めた。

2）エトヴェシ・ロラーンド大学（ELTE）と共催の第 2 回国際仏教シンポジウムの成果出版

2016 年 5 月 26 日㈭27 日㈮の 2 日間ハンガリーの ELTE 東アジア研究所の共催により、「仏陀の言葉とその解釈」というテーマで開催した第 2 回共同シンポジウムの成果を、ELTE のハマル・イムレ教授と井上尚実研究員の共編で、出版するために、井上研究員が編集校正作業を進めた。

⑤The Eastern Buddhist Society 東方仏教徒協会（EBS）の事業

第 48 巻第 1 号を 10 月に刊行し、第 48 巻第 2 号を 3 月に刊行した。

編集顧問の制度を見直し、他の英文学術雑誌の体制に合わせる形で 5 年任期で新たに 8 名の編集顧問を任命した。

なお、2021 年に予定している第 3 シリーズに向けて様々な調整を行った。そして 2021 年に迎える協会設立百周年記念事業について企画し始めた。

⑥公開講演会の開催

2019 年 4 月 23 日㈫にジョリオン・トマス氏（ペンシルバニア大学助教授）を講師として招き、「Japanese Buddhists and Religious Freedom」（日本人仏教者と信教の自由）という題名のもと、公開講演会を開催した。

2019 年 5 月 23 日㈭にジョナサン・シルク氏（ライデン大学地域研究研究所教授）を講師として招き、「Editing without an Ur-text: Buddhist Sūtras, Rabbinic Text Criticism, and the Open Philology Digital Humanities Project」（原典を欠いた編集――仏教経典、ラビ文献の本文批評と、オープン・フィロロジーというデジタル・ヒューマニティーズのプロジェク

ト）という題のもと、公開講演会を開催した。

2019年9月27日㈮にジェフ・シュローダー氏（オレゴン大学准教授）を講師として招き、「「死ぬときはみな仏になる」：曽我量深と戦時下の大谷派の教団」という題のもと、公開講演会を開催した。

〈東アジア班〉

Ⅰ．研究会

中国社会科学院古代史研究所との学術交流協定に基づく研究活動として2回の研究会を開催した。

(1) 中国社会科学院古代史研究所より4名の研究者を招聘し、2019年5月22日㈬に響流館3階マルチメディア演習室において公開研究会を実施した。報告者及び報告タイトルは以下の通りである。博明妹氏（研究員、総合処副処長）「歴史研究所の最近5年間の対外学術交流」、戴衛紅氏（研究員）「東アジアの簡牘文化の伝播：韓国出土“椋”字簡を中心に」、王啓発氏（研究員）「先秦儒家学派の先王観の概説」、卜憲群氏（研究員、研究所長）「先秦秦漢の民間輿論と国家統治」

(2) 木越康学長・浦山あゆみ副学長・井黒忍准教授を派遣し、2019年9月16日㈪、中国社会科学院古代史研究所において研究報告を行った。報告者及び報告タイトルは以下の通りである。木越康氏「中国浄土教と親鸞の他力思想」、浦山あゆみ氏「『大唐三蔵取経詩話』における「兎」」、井黒忍氏「女真と胡里改－鉄加工技術に見る完顔部と非女真系集団との関係－」

西蔵文献研究

チベット語文献のデータベース化

研究代表者・教授　三宅 伸一郎
（チベット学）

1. チベット語文献の電子テキスト化・画像デジタル化とその公開

2007～2015年度の間借用し、整理・研究を行った宗林寺所蔵・寺本婉雅（1872-1940）旧蔵チベット語文献中のケンチェン・パンディタ＝イェシェー・ペルデン『ホルの地に王統と仏教・仏教の保持者・文字の創始・寺院などがいかに現れたのかを説く「宝の数珠」』（1835年著作）に対する研究成果として、当該文献のチベット語テキストに、そのモンゴル語版である『エルデニーン・エリヘ』のページ数・行数を記入し、原本の影印と日本語・チベット語による序文を付したものを刊行した。

- 大谷大学真宗総合研究所・西蔵文献研究班（編）『イェシェー・ペルデン著『モンゴル仏教史・宝の数珠』：寺本婉雅旧蔵』大谷大学真宗総合研究所、2019年。

刊行に合わせ、2019年11月21日には、モンゴル科学アカデミー言語文学研究所のオトゴンバータル氏を講師に迎え、「イェシェー・ペルデン著『モンゴル仏教史・宝の数珠』－寺本婉雅旧蔵－」刊行に寄せて」とのテーマで公開研究会を行った。

この他に、本学図書館所蔵チベット語文献のうち蔵外13940『極楽に生まれるポワ（遷移）と犯戒還浄など）』に対する研究や、『プトン仏教史』第1章仏教概説の部分の邦訳研究を行った。

2. モンゴル国立大学との共同研究

モンゴル国立大学総合科学部との学術交流協定に基づく共同研究の第Ⅱ期の研究成果の取りまとめを行った。また、2020年1月24日～1月31日まで、モンゴル国立大学総合科学部人文系哲学・宗教学科准教授S. ヤンジンスレンを招聘し、13～17世紀のモンゴルにおける仏教寺院の発展について共同研究を行った。1月30日には、氏を講師として、「19～20世紀のモンゴル僧ザワーダムディン・ガブジの著作について」のテーマのもと公開研究会を行った。

3. 海外の研究者・研究機関との交流

2018年10月に本学と中国蔵学研究中心の間で「学術交流に関する協定書」が締結された。これを受けて、今年度、中国蔵学研究中心との間で共同研究を行うことを計画したが、新型コロナウイルス感染症の流行により研究者の招聘が困難となり、実施することができなかった。

ベトナム仏教研究

ベトナム社会科学アカデミー宗教研究院との共同研究

研究員・教授　箕浦 暁雄
（仏教学）

本研究プロジェクトは、ベトナム社会科学アカデミー宗教研究院との間で締結された「学術交流に関する協定」に基づいて推進する共同研究である。調査・

研究のみならず研究者育成などベトナム側からの要請に応じて、仏教研究に関する相互学術交流を行うことを目的として推進してきた。

今年度は、専ら宗教研究院との相互学術研究の一環として計画してきた『日本仏教概説』刊行のための原稿作成作業に取り組んできた。さきに準備した『日本仏教概説』和文原稿をベトナム語に翻訳する作業を、ファン・ティ・トゥ・ヤーン嘱託研究員（Phạm Thị Thu Giang　ハノイ国家大学附属人文科学大学准教授）が担当してきた。現在すでに大部分の翻訳を終えて、完成に近づいている。ベトナムの読者を想定してどういったかたちのものがより良いかについて、大西和彦嘱託研究員からの助言を得ながら全体の作業を進めてきた。また、この概説書に掲載予定である地図と年表の資料作成については、織田顕祐元研究員の協力を得てグェン・トゥン・ザーン（Nguyễn Tường Giang）研究補助員とともに箕浦暁雄が担当した。すでにおおよその下準備を終えている。本論の内容は次の通りである。

1. 受容期の日本の仏教
2. 展開期の仏教
3. 大成期（鎌倉時代）の日本仏教
4. 普及期の日本仏教①
   ――南北朝～室町・戦国――
5. 普及期の日本仏教②　――近世――
6. 近代以降の日本仏教

ベトナムの仏学院で学ぶ若い僧侶たち、研究者はもちろんのこと、仏教に関心を持つ多くの読者に対して、本書が啓蒙的な役割を果たすことができればよい。原稿が完成次第、すみやかにハノイの出版社から単行本として刊行する予定である。今年度中にはすべての作業を終えたうえで、宗教研究院ならびに出版社側と刊行に向けての最終調整を行う。

清沢満之研究

『清沢満之全集』別巻の編纂と思想研究

研究代表者・准教授　西本 祐攝
（真宗学）

本研究は、大谷大学編『清沢満之全集』（岩波書店、以下『全集』）別巻の刊行を研究目的としている。本年度の主な活動は以下の通り。

1、『全集』別巻の編集作業

『全集』別巻の刊行に向けた編集作業を進めた。翻刻は前年度に完了しており、本年度は校正と読み合わせを行い、本文の確認、注項目の抽出、体裁の検討等の編集作業に専念し、入稿原稿の作成を進めた。読み合わせは研究班構成員（11名）が3班に分かれ、週1、2回のペースで定期的に行った。夏季休暇中に大幅なペースアップを図り、入念な確認作業をへて、11月初旬に入稿した。校正刷での校正を3校まで行い3月27日に刊行した。別巻Ⅰの構成は次の通りである。

口絵
凡例
目次
哲学史講義
　［総論］
　Ⅰ．古代哲学史
　Ⅱ．中古哲学史
　Ⅲ．近世哲学史
注
解題

別巻Ⅱの読み合わせを別巻Ⅰ入稿後すぐに開始した。別巻Ⅱ収録予定の「解説」は藤田正勝氏（京都大学名誉教授）に執筆の内諾を得ており、収録文献や編集方針について情報共有をはかりながら編集を進めた。

2、出張

2019年6月24日㈪、岩波書店に西本祐攝（研究代表者）と大艸啓（庶務）で出張。前年度に『全集』別巻刊行について岩波書店の担当者と出版交渉を行っており、2019年4月に同社からの出版が確定した。これにより①契約方法、②編集スケジュール、③入稿原稿の体裁、④『全集』オンデマンド版の販売、の4点について早急に確認する必要があり、担当者との確認を行った。

3、公開研究会の開催

2019年12月19日㈭、廖欽彬氏（中国　広州中山大学哲学系准教授、国際日本文化研究センター外国人研究員）を招いての公開研究会を開催。講題は「清沢満之の自他力論と京都学派への影響」である。氏は日本哲学や宗教哲学、とくに日中台の文化を横断する視点から哲学の課題に取り組む研究者であり、清沢満之についての本格的な研究者としては中国で唯一と思われる。中国における清沢満之や真宗研究の現況と課題などが報告され、中国大陸における真宗の宗教哲学としての受容、さらには東アジアの仏教近代化という課題について報告された。

4、『全集』オンデマンド版販売にともなう確認作業

岩波書店からの要請により、『全集』をオンデマンド版として岩波書店から販売することになったため、

『全集』刊行後に把握した修正箇所などの確認や整理作業を行い、岩波書店と共有した。

大谷大学史資料室

大学史関係資料の収集・整理

室長・准教授　DASH Shobha Rani
（仏教学）

本資料室は、大谷大学の公文書及び、大谷大学の歴史を知る上で必要な資料の収集・整理・保存・公開に従事している。2019 年度の活動として①所蔵資料と寄贈資料の整理、②所蔵資料・データ調査・貸出業務、③所蔵資料の学内展示、④学会参加などが行われた。

①総務課所蔵資料と他大学からの寄贈図書やパンフレット等の整理が行われ、図書等の目録化や住所録作成・整理が行われた。

②1941～46 年頃に大谷大学に留学していたサティアン・パンタンランシー師について照会があり、大谷大学史資料や『真宗』から関係する資料等を提示した。そして、全国大学史資料協議会東日本部会創立 30 周年記念展／立教学院展示館・第 6 回企画展「『新しい大学』の誕生－今日の大学の原点をさぐる－」での展示のため写真データ 1 点の貸し出しをした。1892 年（明治 25 年）前後の大学寮の専門各科担当教員と所蔵データベースに関する調査や東方仏教徒協会（EBS）関係資料の照会などを行った。

③年表パネルを中心に大谷大学の歴史について紹介した「年表でみる大谷大学の歴史」（期間：2019 年 3 月 29 日～7 月 23 日）および新制大学として認可された 1949 年当時の様子を紹介した「新制「大谷大学」誕生」（期間：7 月 24 日～9 月 20 日）の学内展示をした。

④大学史に関する知識を深めるために嘱託研究員の松岡智美氏が全国大学史資料協議会とその西日本部会の研究会に合計 4 回参加した。

デジタル・アーカイブ資料室

大谷大学所蔵貴重資料のデジタル・アーカイブの構築

室長・准教授　Dash Shobha Rani
（仏教学）

本資料室は、大谷大学が所蔵する貴重な学術資料のデジタル化、整理、保存、公開に従事する。2019 年度の活動として①大谷大学図書館所蔵古典籍のデータベース構築・公開、②パーリ語貝葉写本の稀覯文献抽出に関する研究が行われた。

①大谷大学図書館所蔵古典籍の書誌学データベースの登録および公開に取り組んでおり、2019 年度は 553 件の古典籍データを新たに公開した。これによって 2020 年 3 月までの公開件数は 14,503 件になる。

②大谷大学所蔵パーリ語貝葉写本（大谷貝葉）は、今から百年余り前のタイ王室寄贈を機縁とした貴重なものである。その所蔵数は国内最大級である。本資料室では、そのデジタル画像化の作業を継続的に行っており、タイ国において現地調査も実施しながら、大谷貝葉における稀覯文献の抽出作業を行っている。

2019 年度は、「大谷貝葉」の中の論書文献 *Atthasālinī*（請求番号：IV-1～16, 18～20）の表題に記されている難解文章の読解の結果、この写本は、ラーマ 1 世（在位：1782～1809 年）の時代に、'Phra Phipat' と呼ばれる地位に在る人物（地位名のみ記載）が布施したものであることが明らかになった。

東京分室指定研究

宗教と社会の関係をめぐる総合的研究 －社会的価値観における宗教の役割の解明－

研究代表者・准教授　井黒 忍
（歴史学）

1. 研究会の開催

社会的価値観に関連する生命倫理、道徳、性差、人権、秩序、死生観、メディア、政教分離、優生思想、多文化共生などの問題と宗教との関係性を考察するた

め、外部より講師を招聘し下記の研究会を行った。

2019 年 11 月 18 日㈪木 越 康 氏（大 谷 大 学 学 長）「「臨床仏教」という発想から－「新しい時代における寺院のあり方研究へ」」

2019 年 12 月 2 日㈪君島彩子氏（駒澤大学仏教経済研究所研究員）「公共空間における仏像の役割－広島・長崎・沖縄の平和公園内の観音像を中心に－」

2. シンポジウムの開催

僧侶の妻・母・娘として、また女性僧侶として日本仏教界を生きぬいてきた女性たちに焦点を当て、彼女たちに葛藤や困難もたらしてきた構造を再考するという趣旨のもと、2020 年 10 月 25 日㈰にオンライン公開シンポジウム「日本仏教を生きる女性たち」を開催した。下記 3 氏の発表に加え、ダシュ・ショバ・ラニ氏（大谷大学）によりコメントがなされた。

丹羽宣子氏（國學院大學）「「法華経の世界」を生きる－仏教教理と生活世界の交錯する場に着目して－」

山内小夜子氏（真宗大谷派開放運動推進本部）「女子の得度－近代大谷派における女性の位置と役割－」

福島栄寿氏（大谷大学）「近・現代真宗大谷派の女性教化の特徴－その教説から読み解く－」

3. 現地調査

2019 年 9 月 12 日㈭～2019 年 9 月 15 日㈰

出張先：台湾〔善道寺・同光同志長老教会（台北）、佛光山（高雄）、故宮博物院南分院（嘉義）、媽祖廟（雲林）〕

用務：台湾において仏教およびキリスト教が過去から現在に至る社会の中で果たしてきた役割と、その社会的意義の調査。

出張者：青柳英司、鍾宜錚、西村晶絵

2019 年 12 月 26 日㈭～2020 年 1 月 3 日㈮（2019 年 12 月 30 日～12 月 31 日は個人研究での出張）

出張先：フランス国立図書館、ノートルダム大聖堂、マレ地区

用務：アレクシオン・フランセーズ関連の文献資料調査、カトリック教会における現地調査

出張者：西村晶絵

2020（令和 2）年度「指定・一般研究」研究組織一覧（追加）

■指定研究「東京分室指定研究」研究員の追加（2020. 10. 1 付）

研 究 名	研究課題及び研究組織	
東京分室指定研究	研 究 課 題	宗教と社会の関係をめぐる総合的研究－社会的価値観における宗教の役割の解明－
	研究代表者	井　黒　　忍
	研　究　員	井　黒　　忍（准教授・東洋史）
		青　柳　英　司（PD 研究員・真宗学）
		大　澤　絢　子（PD 研究員・宗教学・近代宗教文学）
		鍾　　宜　錚（PD 研究員・生命倫理学）
		荻　　翔　一（PD 研究員・宗教社会学）【追加】

■東京分室 PD 研究員採用に伴う PD 個人研究班の発足（2020. 10. 1 付）

研究名等	研究課題及び研究組織	
個人研究（荻班）	研 究 課 題	現代における在日コリアンのキリスト教信仰の研究－1960 年代以降の韓国社会の宗教変動に注目して－
	研究代表者	荻　　翔　一（PD 研究員・宗教社会学）

2019（令和元）年度「一般研究」研究成果概要

共同研究

健聴児ならびに聴覚障害児の数学的コミュニケーション能力の測定方法の開発

研究代表者・教授　江森 英世
（数学教育学）

平成 31 年度の研究では、蓋然性という視点だけでは分析しきれなかった事例を、「経験的直観」という視点から分析する方法を開発し、考察を行った。本研究では、幾通りもその可能性がある選択的知覚に対し、瞬時にある特定の選択的知覚をもたらす直観を「経験的直観」と呼ぶことにした。これまでの数学学習を通して育てられてきた経験が、その人の数学的センスとして、他者には見えてこない問題の構造を直観的に直視することに成功させると言うことができる。

【経験的直観】

Polya（1953/1959）は「数学者の創造的仕事の結果は、論証的推論であり、証明である。しかしその証明は、蓋然的推論によって、推測によって発見されるのです。もしも数学の学習が、なんらかの数学の発明を反映するものならば、それは推測に対し、蓋然的推論に対し余地をもたねばなりません（p.4）」と述べ、蓋然性を含む自由な思考を許容することが数学教育において必要だと述べた。従来のコミュニケーション研究、特に新しいアイデアが生み出される過程を認知的に分析するコミュニケーションの創発性に関する研究では、この蓋然的推論という概念が新しいアイデアを生み出す原動力として用いられてきた。「たぶん～だろう、～なのではないか」という数学的厳密性という視点をある程度無視した推論がなければ、つまり、知識として知っている正しいことだけを積み重ねていっても、自分にとって未知の新たな体験となる問題が解決されるわけではない。その意味で、私たちは、これまでの研究において、新しい発見をもたらす蓋然的推論の価値を重視してきたのである（江森，2006）。しかし、瞬時に行なわれるメッセージ解釈において、これまでの研究でも、蓋然的推論という概念では説明がつかない事例が発見されている。本研究では、こうした蓋然性だけでは分析しきれなかった事例を新たな視点から分析する方法として、Kant（1781/2012）や Schopenhauer（2004）の哲学に見出される「経験的直観」という概念を研究方法論として用いて、数学的コミュニケーション能力の測定指標とする方法論を構築した。

共同研究

ウェアラブル端末を用いた大学生の学習意欲喚起のための研究

研究代表者・元特別研究員　上田 敏樹
（情報工学）

睡眠は日常生活における活動と密接な関係を持つため、睡眠障害や睡眠不足は、人が本来発揮できる行動に対し大きな制限となる可能性を持つ。日本人は他の先進諸国と比べて睡眠時間が短いとの調査結果が経済協力開発機構（OECD）等により報告されているが、10 代および 20 代の日本人はスマートフォン社会の到来により十分な睡眠時間と質が確保できない要因が増加し、夜型化が進んでいると考えられる。特に、大学生の場合は自由な時間が比較的多いため生活パターンが不規則になり、学習の進展に影響する可能性がある。従来、大学生の睡眠についての研究はピッツバーグ睡眠質問票などの質問票による学生からの回答データを分析したものが多い。一方、身近な IoT（Internet of Things）であり、キャンパスにおいても学生の利用が始まっているウェアラブル端末の着用により、生体データを PC に直接取り込むことができる。そこで、睡眠時間帯の改善を希望する 1 名の学生に対し、2017 年 1 月から 11 月までの間、リストバンド型とメガネ型のウェアラブル端末を利用した生体データを取得した。また、その先行研究として 2016 年に 12 週間に渡って大学生 1 名の睡眠時間、歩数、BMI 値のデータを取得した。本年度は、これらのデータを使い、睡眠時間や睡眠時間帯を基準にした生活の改善事例について考察するため、睡眠時間帯と睡眠時間との関係の可視化、及び睡眠状態と授業での集中度の相関関係の分析を試みた。この結果、大学生が睡眠状況を自覚するための方法としてリストバンド型ウェアラブル端末が有効であること、また、生活リズムが不規則になる原因はスマートフォンの過度な利用にあること、さらに帰宅時刻、睡眠開始・終了時刻、睡眠時間などの生活パターンを可視化することが睡眠時間帯の改善に役立つことが検証できた。

本研究成果については、ブダペストで開催されたKES 2019学会において発表し、論文はProcedia Computer Scienceに収録されている。

4年間に渡る本研究は、本年度にて完了した。Society 5.0に向けた人材育成が求められている大学教育において学生の能力、熱意に対応した個別かつ多様な教育を提供するための手段となるウェアラブル端末の活用に今後とも貢献してゆきたい。

共同研究

変動帯の文化地質学

研究代表者・教授　鈴木 寿志
（文化地質学）

文化地質学の科研費は基盤研究（B）として3年目を迎え、真宗総合研究所では計6名体制で共同研究を行った。

2019年度は、文化地質研究会の学術雑誌『地質と文化』の第2巻第1号を6月30日に、そして第2号を12月31日に刊行した。日本地質学会山口大会では、9月25日に14件の口頭発表と4件のポスター発表が行われた。3月には文化地質研究会第3回学術大会を大谷大学にて開催する予定であったが、新型コロナウィルスの蔓延のため次年度に延期せざるを得なかった。研究代表者は、『地質と文化』の編集を担当し、地質学会では世話人を務めた。また以下の個別研究をそれぞれ推進した。

大分県臼杵磨崖仏の調査［鈴木寿志］：臼杵磨崖仏は現地の溶結凝灰岩露頭に直接彫られている。それ故地下水の影響で風化が著しいが、対策・修復された磨崖仏を観察することができた。

欧州文学と地質学［廣川智貴］：ドイツの出版者として知られるF・J・ベルトゥーフ（1747-1822）は地質の問題に関心を寄せていた。『博物誌』に掲載された「ガイレンロイトの洞窟」では「下降」のモチーフが強調されている。これは同時期のドイツの地質学・文学の状況を暗示している。

タイ仏教の結界石［清水洋平］：8月にタイ国第1級王室寺院Wat Phoを訪れ、Phra Rajapariyattimuni長老の案内により、非公開のTamnak Wasukri Residenceの庫裏と結界石とのかかわりについて調査した。

保育園から始まる地質学［梅田真樹］：幼児の石とのかかわりを観察した結果、石は子どもの発達にとって重要な役割をもつことがわかった。今後、養成校で身近な石についての授業をすすめ、石に関心のある次世代の保育者を育てることが必要である。

地質学の普及［大井修吾］：滋賀県の田上山ペグマタイトに産する水晶や球状花崗岩、花崗岩により変成作用を受けたホルンフェルスについて調査した。その成果については琵琶湖博物館発行のペグマタイトに関する特集で報告予定である。

文献調査［石橋弘明］：近年刊行された地質文化に関する書籍を調査し、学術誌に書評2篇を執筆した。

共同研究

地方の社会解体的危機に抗する〈地域生活文化圏〉の形成と展開

研究代表者・教授　西村 雄郎
（地域社会学・コミュニティ論）

本研究の目的は、地方の社会解体的危機が進む中で、政府が「選択と集中」をキーワードとして地方再編を推進していることに対抗し、各地域がもつ自然・歴史・文化の中で育まれた地域固有の生活原理である〈地域イデア〉を基底におき、地域住民が自律的、内発的に形成しているサスティナブルな〈地域生活文化圏〉の特質を解明し、これを通して「日本社会の新たなあり方」を構想することにある。

この課題を達成するため、16名の研究分担者、研究協力者からなる本研究チームは、2014-2016年度と2017-2019年度に科学研究費基盤研究（B）をうけ、十勝・帯広圏、大崎圏、綾部圏、日田圏の4圏域で調査研究を行なってきた。第1期の研究では各圏域の地域活動の事例的分析を行い、第2期では事例研究を深め、それらの活動の〈地域生活文化圏〉における意味づけに分析を加え、研究対象地域の特質を明らかにしてきた。

本年度はこれをふまえ1）十勝・帯広地域生活文化圏、2）大崎地域生活文化圏、3）綾部地域生活文化圏、4）日田地域生活文化圏における調査研究を継続するとともに、前年度から比較対照地域として追加した①福井県鯖江市における稲作兼業と地場産業を中心とした地域づくり、②大分県中津市下郷農協における小規模農協を中心とした地域づくりについて聞き取り調査を企画した。

ただし、これらの調査は新型コロナウイルス感染の流行によって十全に実施することができず、今年度の研究課題としていた調査対象地域の比較社会学的研究

を十分に実施することはできなかった。

ただし、2020年度の科学研究費補助金基盤研究（C）で継続研究が認められたので、今後はこの研究費を用いて、調査対象地域の調査研究を深め、比較社会学的考察を加えることによって「地方の社会解体的危機に抗する〈地域生活文化圏〉の形成と展開」の特質を明らかにするとともに、最終的な研究課題として設定した「日本社会の新たなあり方」を構想していきたいと考えている。

共同研究

世親作『釈軌論』の総合的研究

研究代表者・講師　上野 牧生
（仏教学）

本研究は５世紀頃の北西インド文化圏で活動した仏教僧・世親（ヴァスバンドゥ）の手になる『釈軌論』の解読研究である。『釈軌論』は徳慧（グナマティ）の『釈軌論注』ともサンスクリット原典の発見に至っておらず、また漢訳もなく、唯一、チベット訳が残されるのみである。

『釈軌論』は全５章から構成され、そのうち第2、4章については本研究課題の研究分担者が、第１章については研究代表者がその解読研究を公表済みである。そのため本研究では、残された第3、5章が取り組むべき課題である。

五カ年にわたる研究計画の三年目に当たる本年度は、最終第５章の総仕上げに着手した。その概要を以下に記す。

第５章では、「説法者」の予備軍に向けて、説法の見本が示される。特にその第３節では、奇譚・漫談・厭世譚の実例が紹介される。それぞれ、聴き手を驚かせる・笑わせる・〔輪廻や欲望や怠惰を〕厭わせることを目的とする小話である（この３点が布教の契機として重視される）。それらはいずれも簡潔で短く、任意の引用、そして説法での実用に適する。おそらくは説法の前に、あるいはその合間に、説法者の声に耳を傾けない相手に向けて語られるものであろう。

『釈軌論』から推測する限り、少なくとも世親自身が説法者であった、とはいえそうである。とはいえ、世親が居眠りする聴衆や落ち込んでいる聴き手にまで気を配る様は驚きでもある。あまつさえ、喜劇的な話や下世話な話、自虐までを説法に織り込み、時には聴き手に合いの手を求めている。そうまでして世親が人々を佛教の聴聞に導こうとするのは、そこまで考慮しなければ、人々が佛教に耳を傾けなくなった当時・当地の時代状況を反映しているのかもしれない。

いずれにせよ、『釈軌論』第５章の記述は、５世紀前後の説一切有部圏域における説法者の実態の、その一端を記したものとして注目に値する。

次年度は、第３章の批判的校訂テクスト・訳注の作成に着手する予定である。

共同研究

5～13世紀ユーラシア東方における都城と仏塔の比較史的研究と３Ｄアーカイブ作成

研究代表者・教授　武田 和哉
（歴史学・考古学・人文情報学）

本研究は、日本や中国などを含むユーラシア東方の世界において、主として5～13世紀の時期を中心として各地に造営された都城と、仏教のシンボル的モニュメントである仏塔に焦点を当て、双方の果たした役割や位置関係、モニュメントとしての特質などの分析を通じて、その背景にある当該時期の政治・経済および社会における仏教の在り方と、その歴史的変遷について、歴史学・考古学・仏教学等の各分野の立場から多角的視点での比較研究を行うことを目的としている。

2019年度は、日本国内の仏塔の調査、および中国国内の仏塔の調査を実施した。国内の調査においては木造塔の調査とともに、石塔も調査対象とし、主に古代都城である平城京や平安京の近隣地において建立された石塔の中から古代（奈良・平安時代）の事例を選んで、踏査と写真撮影等を行った。また、中国国内での調査では、内蒙古自治区や遼寧省内に残る遼・金時代の都城と寺院・塔跡について踏査を行うとともに、現地の文化財展示施設を訪ねて展示内容の調査を行い、さらには現地の研究者との交流も行った。

その後、年度末にも同様に中国国内の別地域での調査を予定していたが、折からのコロナ蔓延という事態もあって海外渡航が困難となったため、中止している。

他方で、これまでの調査等によって得た知見については、今後の成果のとりまとめの基礎とすべく、データベース化などを実施した。

最終的には、本研究が目指す仏教と政治・社会等の関係や、その歴史的変遷・時代的背景等に関する総合的な研究視点の提示を行うべく、現下はその基礎とな

る研究作業を継続していく予定である。

共同研究

歴史史料・考古資料活用による次世代作物資源の多様性構築に向けた学際的研究

研究代表者・教授　武田 和哉
（歴史学・考古学・人文情報学）

本研究は、東アジア食文化で重要な位置を占め、日本と中国の農書など歴史史料に記載が多いアブラナ科作物を研究材料とする。アブラナ科作物は全世界各地で栽培され、東アジアの米主食文化圏では中心的副食である。近年、日本では伝統野菜が注目され、これら品種の保存を通じ、遺伝的多様性の重要度への認識が高まっている。

2019年度は、7月に『菜の花と人間の文化史』（勉誠出版：アジア遊学235）を刊行することができた。これは、2014年度に採択された基盤研究（B）（海外学術調査）「アブラナ科植物の伝播・栽培・食文化史に関する領域融合的研究」と、それを継承した本科研の双方の研究成果物であり、内容は以下の通りである。

・総論：「アブラナ科植物の現在－今、なぜアブラナ科植物なのか－」
・Ⅰ章　アブラナ科植物とはなにか：「アブラナ科植物と人間文化－日本社会を中心に」／「アブラナ科植物について」／「植物の生殖の仕組みとアブラナ科植物の自家不和合性」／「バイオインフォマティクスとはなにか」
・Ⅱ章　アジアにおけるアブラナ科作物と人間社会：「アブラナ科栽培植物の伝播と呼称」／「中国におけるアブラナ科植物の栽培とその歴史」／「パーリ仏典にみられるカラシナの諸相」／「アブラナ科作物とイネとの出会い」／「栽培と食文化がつなぐ東アジア」／「植えて・収穫して・食べる－中国史の中のアブラナ科植物－」
・Ⅲ章　日本におけるアブラナ科作物と人間社会：「日本国内遺跡出土資料からみたアブラナ科植物栽培の痕跡」／「日本古代のアブラナ科植物」／「日本中世におけるアブラナ科作物と仏教文化」／「最新の育種学研究から見たアブラナ科植物の諸相－江戸時代のアブラナ科野菜の品種改良－」／「奈良・平安時代のワサビとカラシ」／「ノザワナの誕生」／「近世から現代に至るまでの日本社会におけるナタネ作付と製油業の展開の諸相」
・Ⅳ章　アブラナ科作物と人間社会の現状と将来展望：「学校教育現場での取り組み－今、なぜ、植物を用いたアウトリーチ活動が重要なのか－」／「植物文化学の先学者たちの足跡と今後の展望－領域融合型研究の課題点と可能性－」／「アブラナ科植物遺伝資源に関わる海外学術調査研究－名古屋議定書の発効で遺伝資源の海外学術調査研究は何が変わるか－」

編集：武田和哉・渡辺正夫
執筆：武田・渡辺・矢野健太郎・等々力政彦
　　・江川式部・清水洋平・佐藤雅志・鳥山鉄哉
　　・吉川真司・横山裕人

次いで、9月には中国陝西省西安市に所在する西北農林科技大学人文学院を訪問し、共同研究セミナー「“农业遗产与文明：东亚的传承与经验”东亚学者论坛暨农业农村部传统农业遗产重点实验室学术年会」を開催した。本班からは3名が参加して研究報告を行った。

共同研究

新出資料の調査と分析に基づく沖縄仏教史・真宗史に関する総合的研究

研究代表者・教授　福島 栄寿
（歴史学）

本研究班の2019年の研究活動は以下の通りである。⑴現地資料調査：協同研究員である知名定寛氏（神戸女子大学教授）、川邉雄大（日本文化大学専任講師）、長谷暢（東本願寺沖縄別院職員）と福島が、以下の現地調査を実施した。2019年7月26日～28日：沖縄県竹富島の本願寺派喜宝院布教所で住職への聞取り調査、史料調査及び撮影。石垣島にて、江戸期の真宗法難事件で石垣島に流罪にされた琉球の官吏であり、真宗信者であった仲尾次政隆（1810-1871）に関する史跡調査を現地で実施。石垣市立八重山博物館で、石垣島の郷土史家・喜捨場永珣（1885-1972）の収集資料等の調査及び撮影を実施。調査での収集資料の検討を8月6日・7日に共同研究会（於：大谷大学）で実施。10月5日～7日、那覇市立歴史博物館所蔵「尚家文書」の紙焼き資料の調査、及び首里城周辺の寺跡、那覇市近郊の関連史跡の調査を実施。10月の調査を踏まえ、2020年2月20日・21日共同研究会を大谷大学で開始し、資料の検討作業を実施。以上の調査で新知

見を得、新たな関係史料の収集と撮影が出来た。⑵研究成果：2019年度は、2018年度の本研究班の研究活動を踏まえた研究成果を、学術論文、史料翻刻、学会発表、講演という具体的な諸活動を通して、学界に対してのみならず、一般市民に向けても広く公開することが出来た。論文として、知名「琉球における第三次真宗弾圧事件と『琉球藩王尚泰訴状』について」（『神女大史学』第36号、2019年11月）、福島「明治期初期琉球における真宗布教に関する一考察－清原競秀『日々琉行之記』をめぐって－」（『真宗研究』第64輯、2020年1月）。また2018年度に撮影した史料の要旨・翻刻として、福島・知名・川邉・長谷共著「〈要旨〉［翻刻］真宗大谷派鹿児島別院蔵　明治十一年三月整頓　琉球上申書類綴込」（大谷大学真宗総合研究所編『真宗総合研究所研究紀要』第37号、2020年3月所収、翻刻は、大谷大学学術情報レポジトリで史料公開されている）を発表した。また福島が、真宗連合学会第66回大会（6月7日　於：大谷大学）ならびに難波別院暁天講座（11月8日　於：南御堂）にて、清原競秀『日々琉行之記』を取り上げた発表と講演を行った。

共同研究

西洋哲学の初期受容とその展開－井上円了と清沢満之の東大時代未公開ノートの公開－

研究代表者・教授　村山 保史
（西洋哲学・日本哲学）

本研究の目的は、井上円了と清沢満之の遺稿ノートから発見された東京大学在学時の外国人哲学教師の哲学関係講義録とそれに関連する学生の学習録の公開作業を通じて日本における西洋哲学の初期受容の一形態を解明し、あわせて、その後の井上と清沢の思想発展過程の一端を解明することである。そのため本研究では以下の三つの研究課題を設定している。(1) 井上の哲学ノートを編集し、そこにみられる思想を分析すること、(2) 清沢の哲学ノートを編集し、そこにみられる思想を分析すること、(3) 明治前期の東京大学の哲学教育がその後の私立大学の教育にどのように継承されたかを初期の哲学館と真宗大学における教育制度の確認を通じて明らかにすること。2019年度は1aと1bを重点課題とし、2を並行して行った。

具体的には、重点課題とした（1）については、2018年度に引き続き9冊の井上ノートの翻刻（翻訳）に当たり、『1-1-3-2　最近世哲学史』、『1-1-3-3　Philosophy is meditation ...』、『1-1-3-4　英国哲学書』、『1-1-3-5　古代哲学』（の後半部分）、『1-1-3-6　心理学』、『1-1-3-7　論理学』、『1-1-6-2　稿録乙』、『1-1-6-6　仏書講録』、『1-1-6-11　雑稿』の全文を『井上円了研究センター年報』（第28号）や国際井上円了学会「井上円了データベース」（https://www.toyo.ac.jp/research/labo-center/enryo/iair/33402/）に公開した。（2）については、清沢ノートに含まれていたフェノロサの「哲学（史）」講義のヘーゲル部分、ブッセの「哲学（古代哲学史）」講義の前半部分の翻刻・翻訳を作成して『真宗総合研究所研究紀要』（第37号）に公開した。ノックスの講義録の翻刻・翻訳にも着手した。

（3）については、「井上円了没後100年記念シンポジウム「井上円了／哲学館／近代仏教」」における講演（三浦節夫「哲学館の教育理念と近代仏教」）と国際シンポジウム「東亜人文社會科學研究的新地平線－人物、文化、思想、海洋與經濟的交匯－」における講演（村山保史「清沢満之の宗教哲学」）において、東京大学の哲学教育が哲学館や真宗大学の宗教教育にどのように継承されたかを明らかにした。

また2019年度に予定していた共同研究会、合宿研究会、公開講演会もすべて実施した。

共同研究

モンゴルの世界遺産ブルカン・カルドゥン山に関する歴史文献学及び文化遺産学的研究

研究代表者・教授　松川 節
（モンゴル学）

本研究は、2016年より三年計画で実施した一般研究「モンゴルの世界遺産「大ブルカン・カルドゥン山」に関する学融合的研究」の成果をさらに発展させ、1）大ブルカン・カルドゥン山とチンギス・カンを結びつける歴史資料及び現地伝承を博捜し、チンギス・カン陵墓所在地について歴史文献学的な結論を提示するとともに、2）大ブルカン・カルドゥン山の保存・保護、観光マネジメントに関して文化遺産学的研究を行い、3）この貴重な遺産を過去から未来へといかに継承していくかを共同研究によって明らかにすることを目的とする。

2019年度は①国内研究会を2回開催（6月15日㈯と1月18日㈯、於：大谷大学）して原典史料の会読とモンゴル側が提示している保存保護策の検討を行

い、②現地モンゴルでは1に重点を置き、現地資料と現地伝承の収集研究をおこなった。

①は第1回国内研究会において研究協力者の松田孝一（大阪国際大学名誉教授）が「ブルカン・カルドゥンについての文献資料（ペルシャ語、モンゴル語、漢語）」、同じく研究協力者の本中眞（元・内閣参事官）が「富士山－信仰の対象と芸術の源泉－　その世界遺産登録への経過と今後の方向性」と題してそれぞれ報告した。第2回国内研究会に合わせてモンゴル側研究協力者のB. ツォクトバータル（モンゴル科学アカデミー考古研究所）とB. ハシマルガド（モンゴル国自然環境省ハン・ヘンティ特別保護行政局）を招聘し、「ブルカン・カルドゥン山の調査経緯」、「世界文化遺産登録後のブルカン・カルドゥン山」と題してそれぞれ報告した。また、研究分担者の小野浩（京都橘大学）が「ブルカン・カルドゥン山についてのペルシャ語資料」、大高康正（静岡県富士山世界遺産センター）が「富士山信仰史の諸段階～16世紀までを中心に」、堀内眞（山梨県立富士山世界遺産センター）が「17世紀以降の富士山信仰―冨士講および富士道の調査成果―」と題してそれぞれ報告した。②は松川が現地調査（4/25～5/6、10/8～10/15）を行い、また、松川と研究協力者の伊藤崇展が現地調査（8/4～8/21）を行った。

共同研究

日本の地方部における多文化化対応とローカルガバナンスに関する地域比較研究

研究代表者・准教授　徳田 剛
（地域社会学）

本研究は、深刻な人口減少と外国人人口の増加が進む日本の地方部において、地域在住の外国人住民への言語・生活両面におけるサポート体制を充実させながら、多様なルーツを持つ人たちが地域生活への適応や社会参加を経て地元住民とともに地域を支える存在となっていくための条件整備とそのための方法論を探求するものである。

本研究では、中四国の地方部での事例研究を中心に進めてきたこれまでの研究内容をより発展的に展開させるために、日本国内の他地域および海外の諸事例との比較検討に重きを置いている。そして、1)「地方部における外国人住民の就労・生活・社会参加」、2)「地方部における多文化共生施策」、3)「地方政府の移民政策に関する国際比較」という3つの課題を設定し、研究チーム内で役割分担を図りながらしながら進めている。

2019年度では、まず3年間の研究課題と実施計画について研究分担者、共同研究者らとの間で情報共有を図ったうえで、各自の課題についての情報収集と分析を行った。また、研究成果の公開・発信の機会として、1年に2回の公開研究会を開催することとし、第1回研究会は2019年11月30日に大谷大学で実施した。この研究会では、京都府国際センター、京丹後市国際交流協会、城陽市国際交流協会、にほんご豊岡あいうえお（兵庫県豊岡市のNPO法人）よりゲストスピーカーを招聘し、京都府・兵庫県内の地方都市・中山間地域での外国人住民のサポートや社会参加に向けた課題について発表いただいた。第2回として2020年3月に愛媛県松山市で「地方部における地域福祉の現状と外国人ケアワーカーの必要性」に関する研究会を企図していたが、新型コロナウイルスの感染拡大を受けて開催延期となった。地方での移民政策の国際比較（課題3）については、諸資料の検討、関連する学会・研究会・シンポジウム等での研究発表の聴講により、スペイン、フィンランド、カナダなどでの多文化共生施策の実施状況や体制について、情報の収集と整理を行った。

共同研究

中国唐代・道綽浄土思想の基礎的研究

研究代表者　講師　Michael J. Conway
（真宗学）

本研究では2019年度から始まった3年間の研究期間を通して、道綽その人と浄土教思想を、同時代の仏教界及びそれを取り巻く社会と思想的環境の中において捉え直し、道綽の浄土教思想の独自性と革新性とを多角的に検証し解明することを目的とする研究を進めている。

具体的に『安楽集』のテキスト確定および『安楽集』の研究史の調査および整理を進めつつ、定期的に二種の研究会を開催することによって研究活動を推進している。①本学を会場に二週間に一回程度で『安楽集』の詳細な英文と和文の訳注を作成するために非公開の研究会を開催している。②道綽の研究、または隣接する分野に携わっている研究者を招聘し、公開研究会を開催している。これらの活動を通して、①和文と

英文による『安楽集』の詳細な訳注、②道綽の歴史的意義を多角的に明確にする和文論文集の発行に向けた基礎作業を行っている。

本年度において『安楽集』の古写本・古刊本の調査を行い、能う限りのものを複写した。また『安楽集』の研究史を把握するために近代以前に作られた講義録の目録を作成し、大谷大学と大正大学所蔵のものに対し調査し、複写依頼をし始めた。

①の訳注研究会を 13 回、開催し、『安楽集』第一大門第四まで和文と英文による現代語訳を作成した。

②の公開研究会について、6 回、開催し、以下の通りの発表を行った。

「『安楽集』における二諦論と浄土観について」マイケル・コンウェイ

「野村美術館蔵高山寺旧蔵『安楽集』二巻の伝来について」落合俊典氏（国際仏教学大学院大学教授）

「『安楽集』の三身三土義は道綽のオリジナルか？－『無量寿観経纘述』の第九観仏身相好観との先後関係を中心として－」西本照真氏（武蔵野大学教授）

「佛教大学法然仏教学研究センター〈『安楽集』の訳註〉における訳註作業の現在」齊藤隆信氏（佛教大学教授）

「『安楽集』所引疑偽経典の諸問題」大内文雄氏（大谷大学名誉教授）

「道綽の「勧信求往」と浄土法会－『浄土仏教の思想』第四巻「道綽の著作と思想」から四半世紀を経て－」宮井里佳（埼玉工業大学教授）

共同研究

系図・紋章からみる画像記号と文字データの同定・管理・可視化および表現手法の研究

研究代表者・教授　柴田 みゆき
（情報処理学）

系図や紋章は、ある「個」が特定の集団に占める地位等を端的に表示させる手法である。それは人間社会の説明に留まらない汎用性を持つ。通時的に様々な表現手法の変種が存在するが、その選択は無作為ではなく、表現者の明確な意志に基づく価値観の濃厚な反映である。それゆえ、専門家にしか詳細を読み解けない閉じた知識となる事がある。様々な表現手法により描かれた系図や紋章などを調査し、共通する情報や記号を抽出し統一された手法で提示できれば、誰もが簡単に価値観の変遷を観察できるようになる。本研究では、イギリスの紋章の文献調査に加え、その分析の周辺的な作業として同国における家族の様々な表象とそれを可能にする社会の受容の基盤を現地調査した。この成果は、本学ワークショップでの口頭発表により社会に公開した。

以下に、研究成果の概要を述べる。

(1) 現地調査報告

(a) 史料調査

(a-1) ブロンプトン墓地

2019 年 9 月 11 日に墓地の実地調査を行った。同墓地では、紋章を持たない階級の中でも特に富裕階級が、人間と図像情報の接点、系譜記録と、その保存の必要性を社会がどのように認知していたかを調査した。

(a-2) 大英博物館とヴィクトリア＆アルバート美術館

2019 年 9 月 12 日に大英博物館の、14 日にはヴィクトリア＆アルバート美術館に訪問し、史料及び文献資料を閲覧し、一般民間人が紋章を理解するための画像記号の読解の基礎となる知識の涵養の手法を確認した。

(b) 文献調査

(b-1) 大英図書館

2019 年 9 月 10 日、13 日、14 日の 3 日間に渡り、紋章に関する文献調査を行った。特筆すべき成果としては、女性が相続人である場合の紋章の継承についての実例とその解説の資料を得た事が挙げられる。

(b-2) イギリス国立公文書館

2019 年 9 月 13 日にブロンプトン墓地に関する資料調査を行った。1900 年に大規模補修が国費により計画された資料を確認し、同墓地がロンドンの家族史の転換点の史料として重要な調査地である事を確認した。

(2) 研究成果の公開

2019 年 12 月 14 日に開催された、大谷大学文学部人文情報学科主催ワークショップ「人文情報学研究の最前線 2019」において、『イングランドの墓地からみる貴族と庶民の意識の違い』と題する報告を行った（発表 30 分）。

個人研究

再犯リスク低減と更生の基盤づくりを目指したピアサポート活動の試行的実践とその評価

研究代表者・教授　脇中 洋
（発達心理学・法心理学）

科研費（基盤研究（C）：16K03379）助成を受けた2019年度は、これまで続けてきた国立重度知的障害者総合支援施設のぞみの園の研究検討委員として、全国の地域生活定着促進センターで矯正施設を退所した知的障害者等に対してアンケート・ヒアリング調査を行った。この研究検討を通じて、知的障害女性の更生保護における支援の困難さという新たな課題が浮上した。そこで矯正施設を退所した知的障害等女性を対象とした地域生活支援の実態調査研究事業に参画し、またのぞみの園主催の実践者向け研修会（2月）分科会でコーディネーターを務めた。

また実際の事件における心理学的鑑定では、乳児に対する虐待死亡事件において被告人の行為を目撃したという児童養護施設出身少女の証言に関して、虚偽を述べる可能性が窺われ、供述に体験性を欠いているという指摘をした予備考察を5月付で弁護団に提出した。次いで日野町事件第3次再審請求弁護団の求めに応じて、証人の言い回しに関してこれまでに分析した結果を再検討し、形式的・内容的分析のいずれにおいても証人が語る内容を適切に引き出すためには尋問・応答形式ではなく、問わず語りに述べる必要があると結論付けた意見書を1月付で提出した。

これらの心理学的鑑定を通じて、更生保護ピアサポート活動以前に、当事者が述べる事実関係の虚実をいかにして確認するべきかという支援の前提となる課題を十分に踏まえなくてはならないという問題意識へ到達することとなった。

海外調査においては、9月にフィンランドとノルウェーの当事者活動の実態を前年度に引き続いてより詳細に聞き取ったほか、3月にはカナダBC州ヴィクトリアにおいて、前年度とは異なり州単位でのアンクレット監視装置を含む支援の実態を調査し、加害者・被害者双方の支援者が協働する修復的司法の一端を見ることができた。国内では北海道大学付属図書館を複数回訪問して、少数民族の更生保護に関する文献調査を行った。

古屋和彦，関口清美，水藤昌彦，脇中　洋，相馬大祐（2019）当事者が矯正施設入所中から行う地域生活定着支援センターの支援の実態調査　国立のぞみの園紀要 12. 91-106.

脇中　洋（2019）〈大阪高裁平成31年（う）　第257号傷害致死被告事件〉証人THによる目撃証言の体験性に関する心理学的鑑定－予備考察－（弁護団提出）　1-21.

脇中　洋（2020）日野町事件証人・MH氏の言い回しの変化に関する心理学的鑑定意見書　日野町事件第3次再審請求弁護団提出 1-39.

個人研究

幼児期・児童期前期における自己評価変動モデルの構築

研究代表者・講師　渡邉 大介
（発達心理学・教育心理学）

本研究は、能力認知に伴う一連の自己評価変動過程に関して、自己評価変動過程を規定する要因を特定し、幼児期や児童期前期特有のモデルを構築することを目的としている。2019年度は、幼児が自己と友人の能力を認知する際に働く心理過程について検討するために、幼稚園の年長児を対象に、活動に対する自己関与度（自分が好きな活動 or 嫌いな活動）、活動に対する友人関与度（友人が好きな活動 or 嫌いな活動）、自己と友人の遂行レベル（自分が友人より優れている or 友人が自分より優れている）の3変数を組み合わせた8種類の架空の自己評価変動状況（自分が好きな遊びを友人が自分より上手にできた場合など）においてどのような感情が喚起されるかを尋ねた。

予備調査として、自己評価の変動に伴う種々の感情を明らかにする際に必要な刺激の作成を目的とした調査を行った。その結果、感情を表現する言葉やその言葉と結びつく表情、そして喚起する状況を幼児がある程度理解していることが示唆された。予備調査で得られた結果をもとに、本調査で使用する6種類の感情語（うれしい、かなしい、おこった、はずかしい、こまった、くやしい）の選別を行い、各感情を表す表情図を作成した。

本調査では、上述の8種類の架空の自己評価変動状況においてどのような感情が喚起されるかを尋ね、表情図を指差す形で幼児に回答してもらった。活動に対する関与度別の活動の遂行レベルと感情の関係を検討した結果、活動に対する関与度にかかわらず、自分が友人より優れている場合には“うれしい”を選択する

ことが有意に多かった。また、自己関与度の低い活動において友人が自分より優れている場合には“うれしい”と“くやしい”を選択する幼児が多かった。その他の場合に関しては有意な偏りは見られなかった。以上の結果から、幼児は、いずれの活動においても自分が友人よりも優れていた場合にはポジティブな感情を喚起させる一方で、友人が自分よりも優れている場合には、活動に対する関与度に応じて種々の感情を生起させることが示唆された。

個人研究

東南アジアサッカー市場における移民選手の戦略とネットワーク

研究代表者・教授　阿部 利洋
（社会学）

経済成長と若年層の消費市場参入を受けて、東南アジアのサッカー市場は急速に拡大している。従来、サッカー移民に関する社会学的研究としては、ヨーロッパ市場におけるアフリカ人選手を対象とし、移民の送り出し国と受け入れ国の経済格差とそれに起因する移民選手の否定的環境を批判的に検討するものが多かった。しかし、本研究が対象とした新興市場には、制度的な整備が十分でない一方で移民選手らが能動性を体現する余地が散見され、発展途上のリーグに独特の性格を付与している実態が認識された。また、いわゆる移民の「南－南移動」による市場発展の事例として新興リーグの現状を位置づけることができることも明らかになった。

2019年度は3年間の研究期間の最終年度であり、次の諸点についてタイおよびカンボジアにおいてフォローアップ調査を行った。①メコン地域各国リーグに所属する（主としてアフリカ出身の）移民選手から、同地域のリーグに参入した動機と経緯、これまでに所属した他国リーグとの比較、移籍交渉と手続きの実際、チーム内の人間関係、プレースタイルをめぐる適応戦略、生活環境への適応、否定的経験（怪我、事故、詐欺、差別等）とそれへの対処、各自を取り巻く環境の観察、出身国との関係、将来の展望と準備等について、聞き取り。②所属クラブの外部で行われるインフォーマルなトレーニングの参与観察。

これらの調査による知見は、以下の成果として発表した。

論文

阿部利洋、2019、「東南アジア・メコン地域におけるアフリカ人サッカー選手――役割期待・リスク・戦略」『フォーラム現代社会学』18：31-44

阿部利洋、2019、「サッカーを取り巻くメタゲーム――ポストモダン・サッカー市場におけるアジア戦略」『ソシオロジ』64(1)：117-127

分担執筆

阿部利洋、2019、「スポーツ移民のグローバル移動――サッカーの事例を中心に」（今泉隆裕・大野哲也編、『スポーツをひらく社会学――歴史・メディア・グローバリゼーション』、嵯峨野書院、217-250）

口頭発表

「東南アジア・サッカーリーグにおけるアフリカ出身選手の適応戦略」（第92回日本社会学会大会、2019年10月6日、於・東京女子大学）

個人研究

インド・チベット論理学相互理解のための基礎資料の構築

研究代表者・教授　福田 洋一
（仏教学）

本研究は、インド仏教論理学の大成者ダルマキールティの第二の主著『プラマーナ・ヴィニシュチャヤ』に対する、現存するチベット人注釈書8点について、(1) テキストデータを入力し、(2) 全文検索サイトを公開し、(3) 注釈書に織り込まれた詳細な内容見出し（科段）を抽出・整理し、原典のロケーションを対応させた科段対照表を作成することを目的とする。これらの注釈の多くは新出資料であり、また文字の判読の困難な草書体で書かれているため利用が進んでいなかった。平成26～28年度科研費基盤研究（C）「初期チベット論理学成立史解明のための基礎研究」において、これら写本のテキストの入力を進め、全文検索サイトも構築したが、本研究はその基礎の上に立って、特にインド・チベット論理学双方の研究者が、これら貴重な『プラマーナ・ヴィニシュチャヤ』の注釈書を容易に参照できる資料を提供することを目指す。

初期チベット論理学における『プラマーナ・ヴィニシュチャヤ』のチベット人の注釈には、以下の8点が現存している。

1. ゴク・ローデンシェーラップ（1059-1109）
2. チャパ・チューキセンゲ（1109-1169）

3. ツァンナクパ・ツォンドゥセンゲ（12 世紀）
4. チャンチュプセンパー・ジュニャーナシュリー（年代未詳）
5. チュミクパ・センゲペル（1200-1280 頃）
6. チョムデン・リクペーレルディ（1227-1305）
7. プトゥン・リンチェンドゥプ（1290-1364）
8. ポトン・ジャンペーヤン・ショレワ（年代未詳）

これら全てのテキストを入力し、その電子テキストを提供し、また、他のプレ・ゲルク派の論理学書（およびカダム派論理学批判の書サキャ派のサキャ・パンディタ著『量・正理の宝庫』とそれに対する古註釈を含む）ととの横断検索サイトを作成した。また、以上のうち、科段ができているのは、1、2、3、7、8 である。以上の成果は、https://tibetan-studies.net/earlytibetanlogic/doku.php において公開している。

個人研究

ダンス教育で育てるからだを問う～ソマティクスとボディ・ワークのかかわりから

研究代表者・教授　原田 奈名子
（体育科教育･舞踊学および舞踊教育学･Somatics）

本研究は、基盤研究（C）（一般）2017 年から 2021 年までの 5 年間、他 2 名と行っている。本報告は 4 年目である 2019 年度について行うものである。代表者である原田は、2020 年 3 月に「一人称で語る BMC（Body-Mind Centering）®体験　－ダンス教育における「振り返り」を問う－（大谷大学初等教育学会研究紀要第 2 号：102-117）をまとめた。これまでのダンス授業の振り返りは、その時間の行為を振り返り、「その動きはイメージにふさわしかったか」「作品のはこびのどこに位置づくか」等、考えて記述することを求めてきた。そこで、舞踊教育に携わる 3 名が BMC というソマティック運動の代表的なワークを受講し、それぞれがからだにどんな体験をしたかをまとめてみた。その結果、「からだに起きたこと」「からだがふるまってしまったことはなにか」を問うこと自体が「ダンス教育で育てたいからだを育てる」に資するのではないかと考えるに至った。次年度はこれを試行実践する。また、『映像で学ぶ舞踊学（遠藤保子監修、弓削田綾乃他 3 名編著、大修館書店）』の一部「踊る身体の『個別性』『普遍性』に本研究の成果も生かして執筆した（2000 年 3 月出版）。

村越は、臨床教育学の立場から舞踊教育とソマティクスおよびボディ・ワークの分野を担当し、2019 年の後半から 1 年間は米国に滞在し米国における舞踊教育の資料収集に従事した。その成果の共有はコロナの影響もあり十分には至らないでいる。大橋は、スポーツ哲学会夏季合宿研修にて「学校のダンス教育における「学び」を問う－「表現力」の理解をめぐって」を発表した。

2019 年 6 月に大橋有子（LAM/BF：ラヴァン・ムーヴメント・アナライシス／バーターニエフ・ファンダメンタル指導者資格保有者・お茶の水女子大学）を招いて研究会を開催した。BMC と LAM/BF は世界の 2 大運動分析ツール（M. Eddy）とも言われ、どちらもソマティクス分野の 2 大ボディ・ワークであり欧米圏の舞踊教育では必須の理論と実践である。

個人研究

嗅覚刺激に基づく感覚間相互作用を活かした美術鑑賞教育法の実践的研究

研究代表者・准教授　池永 真義
（美術科教育学）

聴覚や触覚、視覚などの感覚における互換性を意味する「感覚間相互作用」は、古くから美術の領域で想像力を発揮し、新たな表現を生み出す重要な手立てとなってきた。表現教育の実践者は、幼い子どもほど共感覚が優れており、柔軟な表現を生み出すことを経験的に理解している。例えば幼児教育における身体活動、音楽（リトミック）等の表現活動を一体的に行う複合的表現活動の実践などがある。

図画工作科の表現領域においても、視覚だけでなく触覚や身体感覚等、諸感覚の互換性や統合性をいかした実践が見られる。ただ、鑑賞領域では、視覚優位の方法に比重がおかれ、視覚と他の感覚を複合的に働かせる教育法の開発は十分でない。

そこで本研究では、原始的で低位な感覚とされがちな嗅覚に注目した。神経科学等では、嗅覚が複数の感覚と結びつき影響を与える、匂いが他の感覚以上に記憶や思考との繋がりをもつ等の知見がある。そこで嗅覚刺激が鑑賞における記憶や思考を促進するのではないかという仮説を立て、研究目的を、標題にあげる美術鑑賞教育法の開発とした。

昨年度までは、嗅覚刺激と視覚との相互作用（記憶・思考の様相）を把握するための基礎研究を行って

きた。例えば香水という嗅覚刺激（香り）をもとにした視覚化作業、具体的には香水瓶のデザインおよび立体表現を通して、嗅覚刺激による視覚的イメージが美術的な固有の次元をもっているのかどうかなどを調査した。

本年度はそのような調査を踏まえ、実際に美術鑑賞教育法として実践できる教材及び単元の開発を進めてきた。計画ではそれらの教材・単元を本実践にかけ、その教育的効用を考察・検証する予定だったが、新型コロナ感染症によるオンライン授業等により、現時点での教育実践は遂行できていない状況が続いている。本研究は教育実践研究という性格上、ある程度の母集団を対象とする現実的な教育活動において実践する必要がある。適切な時期を見据えた上で実践したいと考えている。

個人研究

19 世紀フランス詩における宗教的混淆－教育から文学創造へ

研究代表者・元特別研究員　塚島 真実
（フランス文学）

本研究は、フランスの 19 世紀、特に 1850 年代から 1870 年代の、高踏派からランボーにいたる作品におけるヘレニズムとキリスト教の混淆を明らかにすることを目的としている。最終年度にあたる平成 31 年度は、神話的形象の表象に見るレアリスム描写に焦点を当てた。

フランス詩史において高踏派の特徴とされてきたのがヘレニズム彫刻を模した身体の表象であった。一方、小説と絵画において 19 世紀に花開いた〈レアリスム〉を象徴するのが、理想を排し醜悪さとも対峙する身体の表象である。こうしたフランス 19 世紀の芸術における身体の俗化の流れの中で、詩は他の芸術作品からどのような影響を受け、また他の芸術ジャンルに比してどういった特異性があるのかを追究する必要があると考えた。

今期は多産な批評家でもあったバンヴィルに着目し、詩人の美術批評・文芸批評を手掛かりに、詩人における〈レアリスム〉の概念と詩作の関連を考察した。特に①レアリスム宣言を行ったクールベに対する美術批評、②雑誌『レアリスム』との論争の２点からバンヴィルにおける〈レアリスム〉概念を探り、バンヴィルの詩がもつ諧謔精神とレアリスムの関係について分析を試みた。バンヴィルにおいて〈レアリスム〉は特定のクールベ絵画と結び付けられた狭義のもので、それゆえに目に見えるもの以上の真理を謳うべき詩というジャンルとは相容れないものと断定される。だが一方で、〈レアリスム〉の語を使わないながら現実を細密に描写する態度について称賛する批評が見られる。神話的世界だけでなく現代社会への諷刺詩ももものしたバンヴィルのジャーナリスト的視線は、おおいにレアリスムと通底するものがあろう。上記の研究成果の一部については、日本フランス語フランス文学会のワークショップ「19 世紀における詩とレアリスム」を企画し発表した。

本研究において教育と文学創造の関連については具体的な分析を当初の目的まで進められなかったのは遺憾ではあるが、一方でこうした小説や絵画との関連において、身体の表象を軸に考察を広められたことは想定外の収穫であった。

個人研究

東南アジア大陸部で発展した積徳行文献の体系解明

研究代表者・特別研究員　清水 洋平
（仏教学・南伝仏教）

本研究の目的は、16～19 世紀の東南アジア大陸部：特にタイで発展し、独自に編纂された積徳行という宗教的実践を勧奨する文献：アーニサンサを考察し、①ほとんど知られていなかった同文献群の全体像を把握すると共に、②伝統的パーリ仏典（正典としてのパーリ三蔵及びその註釈文献）と対比・校合しアーニサンサ文献のパーリ仏典史上における変遷・発展の体系的解明を行う。

(1) 前年度までに選定した、タイ仏教の特徴的な現実相との対応が明らかな本研究に適する代表テクスト *Sabbadāna-ānisaṃsa* について、同名で同系統の内容を有する３種類の貝葉写本：コーム文字（主としてパーリ語を記述するために使用された初期クメール文字）パーリ語で記された 10 束からなる写本、コーム文字パーリ語で記された１束からなる写本、コーム文字タイ語で記された 1～2 束からなる写本の内容の比較研究に取り組んだ。これら３つのバージョンが作成された順序や各々のバージョンの作成意図を明らかにした。また、これらの文献が拠り所とした伝統的パーリ仏典からの引用語句や表現方法について考察を行い、タイの積徳文化において同文献が、伝統的パーリ仏典が説く内容と現実世界で見

られる在家者による布施行とを取り持つ役割を果たしていることを確認した。

(2) エディション作成等、代表として選定したテクストの精緻な文献研究を行うためには、手持ち資料の充実を図ることが必要不可欠である。よって2019年8月には、バンコクに所在する第一級王室寺院Wat Pho内にあるTamnak Wasukri Residence（ラーマⅠ世の王子でWat Pho寺院初代住職のもとで出家したWasukri長老の庫裏のことであり、図書館（経蔵）を併設）に赴き、関連資料の調査を実施した。

個人研究

『甚深伝』校訂と解釈によるミラレーパの仏教思想の解析

研究代表者・特別研究員　渡邊 温子
（仏教学・チベット学）

本研究の最終的な目的は、ミラレーパの仏教思想を再構築し、彼の思想を解明することである。それにより、チベット仏教後伝期における仏教開花についての基盤研究を提供する。上記の目的を達成するために、現存する諸ミラレーパ伝の原型である『甚深伝』を研究対象とし、現在入手・閲覧可能な写本を用いて①校訂本の作成、および②翻訳研究を通じた文献分析により新たな研究モデルを構築する。

①校訂本の作成に向けて、ニュアーク版とオックスフォード版写本の複写資料を入手し、前年度に入力を終えた北京で出版された活字本『甚深伝』のテキストデータと校訂するための下準備を整えた。②前年度に引き続き『甚深伝』の後半の翻訳を行った。それと並行して『ミラレーパの十万歌』との異同の確認及び、チベット語辞書にみられない難語の収集を行った。5月1日からは産前産後の休暇、育児休業を取得し研究を中断した。

個人研究

認知症患者との「関係性」についての新モデルの構築と展開ー「主体」論を超えて

研究代表者・特別研究員　翁 和美
（社会学・文化人類学）

本研究は、同時代の異なる社会における酷似する介護実践の意味づけを比較することで、主体論を乗り越える認知症患者との「関係性」についての新モデルの構築と展開を目的としている。新モデルの実践が正当に評価されていない介護施設と高く評価されている介護施設とそれらがある社会を比較対象としている。

これまでの調査から、実践の継承という新たな課題が見えてきた一方で、いずれの実践も確立された実践であるため、その起ち上げに関わる個人が、どのような困難に直面し、どのような条件が満たされれば集団実践として確立されていくのかを明らかにする必要がある、という本研究に関わる新たな課題も見えてきた。

そこで、新モデルの起点となる「日常生活世界」アプローチに取り組み始めたフリーランス助産師Aの活動をたどることを本研究の補助的研究と位置づけて、調査を開始することにした。

Aが活動する社会では、助産も医療が基礎にある。Aは、医療の場を否定しないが、在宅医療を目指してもいない。Aは、自宅分娩の経験から、朝起きて食事を作り食べて夜に寝てを繰り返す「日常生活世界」において、一貫して変わらない「日常生活者」を土台に人を診ていくことの重要性に思い至った。本調査は、第一に、Aの着眼点が「日常生活世界」アプローチにあることから、新モデルの起点にある「日常生活世界」アプローチの草創期を見ることができる。新モデルの構築から展開までを射程に入れる本研究にとって本調査は貴重なデータとなる。

すでにAやAの活動に関わる協力者やキーとなる関係者からは調査の許可や調査の協力をいただき、プレ調査を進めている。

個人研究

タスク条件がもたらす日本人英語学習者のスピーキングへの影響

研究代表者・准教授　西川 幸余
（英語教育・英米文化）

タスク・ベース言語指導（Task-Based Language Teaching）は、外国語学習者の言語習得を効果的に促す学習方法として実戦されている。指導者は、タスク学習を指導する場合、何を目的として学習者に言語活動を行わせるか明確にし、言語活動を通じて学習者が意義ある結果を得られるように教えることが求められる（Samuda & Bygage, 2008）。タスクに基づく言語活動時、認知能力の観点から、タスク条件は学習者の言語運用に影響すると考えられている（Skehan, 2018）。外国語学習における言語活動では、インプットの種類や条件といった認知プロセスを考慮したうえで、学習者の言語能力とニーズに応じたタスクの考案が重要である。

本研究では、スピーキング・タスクの条件に、①「繰り返し学習」と、②「異なるインプット（文字情報、あるいは視覚情報）の使用」を取り入れ、繰り返し学習の効果とインプットのスピーキングへの影響について調査を行い、効果的な繰り返し学習の指導方法とインプットの役割について明らかにすることが目的である。2019 年度は、参加学生を募集し、スピーキング・タスクに取り組んでもらい、タスク終了後、タスク活動を振り返るインタビューを実施した。スピーキング・タスクの発話を書き起こし、発話の流暢さ、正確さ、複雑さについて定量的分析ができるようにデータ分析を進めている。インタビュー時の発話は書き起こし、学習者のタスク学習への気づきについて定性的分析を行っている。参加者の振り返りインタビューから、受け取るインプットが異なると、発話時の語彙選択の過程に差があること、また、タスクを繰り返す際に、正確な発話を意識して言語活動に取り組む傾向があることが明らかになった。

2020 年度は、必要な参加者数を満たし定量的分析を可能とするために、継続してスピーキング・タスク協力参加者の募集を行っている。引き続き、発話データの書き起こしとデータ分析に取り組み、英語学習指導に役立つタスク考案への提言につながる考察を進めている。

参考文献

Samuda, V. & Bygate, M.（2008）Tasks in Second Language Learning. Palgrave Macmillan : New York.

Skehan, P.（2018）Second Language Task-based Performance : Theory, Research, Assessment. Routledge Taylor & Francis Group : New York and London

個人研究

生活困難状況にある若者への離家支援としての共同生活型支援の実態及び有効性の検討

研究代表者・講師　岡部 茜
（社会学・社会福祉学）

本研究は、現在の共同生活型若者支援の実態を把握するとともに、社会福祉学で蓄積されてきた施設での生活支援の視点から、その有効性を検証することを目的としている。2019 年度は、①2018 年度に実施してきた調査を継続し、全国の共同生活型若者支援の実践者に事業に関するインタビューを実施すること、②調査協力先のうちひとつの施設で一定期間生活するとともに、入居している若者にインタビュー調査を実施すること、の二つの課題に取り組んだ。

①の調査から、現在、若者を対象にして居住を提供している団体の設立背景・動機は、その設立時期を 2005 年から 2010 年までの若者自立塾制度期とその前後の三つに分けてとらえることで、類型化できるのではないかと推察された。若者自立塾制度以前に設立された団体は、社会教育を中心とした合宿やキャンプによる青少年の健全育成を目指す団体が、若者自立塾制度期にはニート・ひきこもり支援を掲げた就労支援を中心とする団体が、そして若者自立塾制度期以後は若者の貧困やホームレス化、まちづくり等の支援も意図に含む多様な団体が登場する。

とりわけ後半の時期においては、刑務所から出所した若者や社会的養護施設を退所したあとの若者など、社会福祉制度の届きにくい周縁の層が利用している事例も見られ、社会福祉制度の限界と連動しながら事業が模索されていることがうかがえる。

以上を含む調査報告は、2019 年 6 月の The World Community Development Conference 2019 でポスター報告としてまとめるとともに、大谷大学哲学会の『哲學論集』66 号（2020 年 2 月）に論文として報告し

た。

①②の調査は引き続き2020年度も可能な範囲で実施を検討しているが、コロナ禍により調査予定を大幅に変更する必要が生じており、状況を見つつ調査・分析を実施していきたい。

個人研究

儒教文化で捉える「孝」の表現と終末期医療倫理の再構築 －日本と台湾の比較を中心に－

研究代表者・PD研究員　鍾 宜錚
（生命倫理学）

本研究は、終末期医療における「孝」（日本の場合は「親孝行」）の表現に注目し、延命治療をめぐる意思決定と家族の葛藤を分析することで、患者の「最善な利益」や「自律の尊重」など従来の倫理原則とは異なる、「孝」の観点から捉える終末期医療のあり方と家族との関係性に基づいた倫理原則の提示を目的とした。従来の医療倫理の文脈では、良い最期を迎えるためには、延命治療など医療措置に関する本人の意思確認が重要視される傾向があり、家族はあくまで本人の自己決定をサポートする役だと強調されている。しかし、儒教文化圏における「善終（善い死）」の概念には、先祖代々が祀られる家で死を迎えることを重要視する宗教的な側面がある。末期状態と診断された親に対し、本人の痛みをできるだけ減らし、自宅にて死を迎えさせることが親に対する究極の「孝」の表現として語られる傾向がある。死をまつわる習俗・文化が存在し、それに順応しながら、医療とのかかわり方を決めていくのが現代社会における死の特徴ともいえる。

こうした現代社会に特有な死の変容と「孝」の関係性を探求するために、本研究は①終末期医療の法制化の議論に見られた「孝」の内実と②終末期医療における「孝」の語りと表現を中心に、文献調査を行っている。2019年度では主に①の部分を中心に資料収集・考察を行いながら、死のあり方と家族との関係性を医療社会学の視点からさらに分析を深めた。死の社会学に関する調査として、9月に英国バース大学にて開催された第14回「死、死にゆくこと、処分に関する国際会議（International Conference on the social context of Death, Dying and Disposal）」に参加し、現代社会における葬式の形の変遷、最期の過ごし方、適切なケアの仕方が社会学の観点からどのように研究してきたのかを学習した。同会議を通して、スイスにおける外国人に対する自殺ほう助の実態、イギリスにおけるホスピスケア推進者と安楽死推進派との論争など、ヨーロッパを中心にそれぞれの国における終末期医療の法制度とその最新の状況を知ることができた。

個人研究

農業奉公の歴史社会学的研究 ——労働を通じた社会的包摂に着目して

研究代表者・任期制助教　阿部 友香
（社会学・農村社会学）

本研究は、奉公というローカルな労働慣行とイエの論理の間で、昭和初期の地域社会において、いかにして社会的包摂の実践はなされていたのかを明らかにすることを目的とする。調査対象地は山形県庄内地方である。庄内は1960年代まで住み込みの年雇である若勢やめらしが水稲耕作農家において確認されており、本研究ではそうした年雇のうち障害をもつ人々に着目する。

2019年度は、雇い主側農家出身者へのインタビュー調査の他、資料調査として、調査地教育委員会の協力により、町史編纂用に収集・管理されている資料を閲覧する機会を得ることができた。収蔵資料のうち、戦前の行政資料、特に農業補習学校と青年学校の閲覧・複写を進めた。これらの資料には、雇い主農家のもとから夜学に通学する農業奉公人の記述があるため、地域社会における農業奉公人の量的把握や当時彼らが接していた農業技術に関する知識などについて確認できた。

調査結果より、障害を持つ奉公人もまた恒常的な雇用労働力として若勢慣行の中に組み込まれていることが明らかになった。若勢慣行の雇用を通じた福祉的側面については、流動性の高い山形県庄内地方の若勢の雇用慣行（奉公先を数年で変更する）のため、障害を持つ奉公人に対して雇い主農家であるイエからの強力な扶助は発生しにくいが、最低限の衣食住が保証される。しかし、この流動性の高い環境ゆえに、一か所当たりの継続性は低いながらも、補助的な労働力としてのポジションには比較的容易につくことができていたことを確認した。昭和期前半の障害を持つ奉公人は、強力な扶助を得にくい代わりに、いずれかの農家に受け入れられることによって働き続けることができていた。したがって、奉公慣行を媒介として、多くの依存先をもつことによるある種の「自立」を果たしていた

といえる。

個人研究

Towards the Development of a Critical Learning Support System for Primary School Teachers of English
小学校で英語を担当する教師に向けてのクリティカルな実践共同体の構築に向けて

研究代表者・准教授　Ryan W. Smithers
（外国語教育・言語学・英米文化）

2013年に文部科学省は「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」を発表しました。それに伴い、2020年度より小学校5、6年時に英語が教科として、小学校3、4年時には英語が外国語活動として導入されます。しかしながら、教員養成の不整備、小学校と中学校の英語のカリキュラムの不明確な連携、財源及び人材不足などの課題は山積みです。小学校では英語を教えることに対する経験、ノウハウが不足しているにもかかわらず、いつ、どのように、何を教えるかは各学校に一任されています。

本研究の目的は小学校の英語教育の実態調査及び小学校で英語を担当する教師が英語を教える上で何を必要であると感じているかを調査することです。京都市内の159校の小学校を対象に現在使用されている教材、その内容を分析し、教師へのインタビューを通してどのような教材（resource）、専門的支援（professional support）が適切及び効果的であるかを調べ、何が不足しているかを探究します。この結果を基に、小学校教師のために教材、専門的支援をオンラインで提供し、教師のクリティカルな学びを促すための持続可能および適切な実践共同体（community of practice）としてのオンラインスペースの構築を目指します。

本研究の成果が高等教育機関、教育委員会、文科省が小学校英語教育向上のためにどのように貢献できるか、その指針となることを望んでおります。

今年度の研究成果は、英語教育の一助にオンライン（オンデマンド）で「小学校英語の授業力アップトレーニング」と題した無料のセミナーを開催いたしました。柏木賀津子（大阪教育大学教授）と渡辺敦子（文教大学教授）のワークショップをオンラインで提供し、教師のクリティカルな学びを促すための持続可能および適切な実践共同体としてのオンラインスペースの構築を目指しました。そのうえで小学校英語の授業ニーズ分析調査アンケートを実施することを始りました。

個人研究

キンギョから見る知覚統合の進化的基盤

研究代表者・准教授　髙橋 真
（比較認知科学）

共感覚は知覚現象であり、必ずしも言語化によって明らかになるとは限らない。しかし、課題遂行中の別の感覚要素の刺激の提示による妨害効果や促進効果の方が明確にすることができる。本研究では、共感覚の進化的起源を明らかにするため、言語を用いないヒト以外の種であるキンギョにおいても共感覚が生じるかどうかを調べる。上記の目的のために、本研究ではキンギョに、特定の刺激に対しては右、別の刺激に対しては左を選択する条件性弁別課題を訓練する。学習が成立した後、ヒトの場合共感覚が生じる刺激とそうではない刺激を提示した時、キンギョにおいても妨害、もしくは、促進効果が課題遂行中に生じるかどうかを調べる。また、同様の課題をヒトでも行い、比較する。

2019年度においては、「明るい音、暗い音」といった音の高低と光の明るさの共感覚がヒトとキンギョの両方に生じるかどうかを調べるため、上記の課題に対するキンギョの条件性弁別課題のための実験装置の作成、実験プログラムの作成、および、ヒトの実験プログラムの作成を行った。キンギョの実験に関しては、キンギョ用の実験装置にマウス用の20㎎ペレットディスペンサーを既存の装置に取り付け、キンギョの選択に応じて餌強化を自動的にできるプログラムを作成した。ヒトの実験に関しては、提示された視覚刺激に対応するキーボードの指定のキーを選択する課題となるようプログラムを作成した。これらのプログラム作成と並行して、提示する視覚刺激の明るさに対して、共感覚が生じやすい音の高さを確定するため、予備実験を行った。予備実験では、成人のヒトに対して、モニタ上に提示した視覚刺激（黒か白）に対して適切と思われる音の高さを調節させた。その結果、黒色に対しては500 Hz 程度、白色に対しては2500～3000 Hz

程度の高さの音に調節された。

このデータに基づいて、ヒトやキンギョの弁別課題中の妨害、もしくは、促進効果を検証する予定である。

個人研究

民主化以降、世代交代がすすむ西アフリカにおいてメディアと若者が抱く「変化」の展望

研究代表者・准教授　田中 正隆
（社会学･社会人類学･民俗学･アフリカ地域研究）

アフリカ諸国では2000年代以降、旧世代の元首の引退や三選禁止の選挙制度によって、政界の世代交代がすすんでいる。それはベナン、トーゴ、セネガル、ブルキナファソといった仏語圏西アフリカで顕著である。だが、変動期にあっても、アフリカでは年長者や一部の政治サークルによる政策決定権の独占がつづき、一般民衆は政治論議に参加できなかった。本研究は、アフリカの民主化前後に生まれた二十～三十代の人々を「若者」として焦点化し、政権の世代交代にともなって、社会変革を求めて胎動する若者層の活動と今後の展望を明らかにすることを目的とする。

アフリカは二十代の年齢層が多数派となる「若い大陸」と呼ばれてきた。15-24歳の人口は全体でおよそ2億6000万人で、25歳以下の占める人口比は6割以上とされる。だが、エスニック、年長者、利権における既存の優位集団の制約から、若者層は表舞台にあがる順番がくるのを延々と待ち続ける待機状態waithoodにおかれてきた。彼らはこれに声をあげ始めており、西アフリカではセネガルの *Y en a marre* やブルキナ・ファソの *Le balai citoyen* 運動が知られる。しばしば、SNSを利用した若者の呼びかけや、ミュージシャン、ラッパーが加わって政治的メッセージを発している。汚職、政治腐敗の告発や一向に改善しない貧困、社会格差への不満がその内容である。本研究の対象地域では、メディアの参加型番組やファン・コミュニティ（友の会）が若者の不満を包摂する場となっている。

こうした対象についての具体的な研究活動として、ベナン、トーゴ、セネガルでのメディアを介した若者の活動や利用状況の実態把握を現地調査によって行う必要がある。2019年度は7/30-8/25までのベナン、トーゴの滞在中にジャーナリストやオーディエンス関係の人脈をたどり、研究趣旨の説明と目的にあった対象とのラポール構築を進めた。本研究は筆者によるこれに先立つ科研費研究からの深化・発展に位置づけられるが、前研究の成果と本研究へ架橋する内容の成果として

「In the Hope for Change: Media and Audience in the Post-Charisma Era in Benin and Togo」『真宗総合研究所研究紀要』No 36
「In Hope of Change: Active Audiences and their Solidarity in the Post-Charisma Era in Benin and Togo」19th IUAES in Poznan　口頭報告
「Mediation between the Secular and the Religious: A local radio program in Benin and the Post-Secular argument」『大谷学報』98(3)

を公開した。活字刊行業績についてはpdf化し、学術系サイトのAcademia.eduやResearch Gateにて公開した。

個人研究

社会改善運動へのソーシャルワーカーの参画可能性についての研究

研究代表者・准教授　中野 加奈子
（社会福祉学）

2019年度は、昨年度に引き続き、(1) ソーシャルアクションの国際比較研究－日本、東アジア、南欧、(2) 進歩的（Progressive）ソーシャルワークの発展に向けた東アジアとの共同研究、という二つのテーマに取り組んだ。

(1) については、オーストリアで開催された国際ソーシャルワーカー連盟のヨーロッパ大会に参加し、ヨーロッパ各国でのソーシャルアクションの実態を視察した。また、大会前にはウィーン市内でホームレス当事者が運営・ガイドするツアーに参加し、ウィーン市内でのホームレス支援と、ホームレス・難民支援向上に関する当事者を巻き込んだソーシャルアクションの実態をヒアリングした。ソーシャルアクションへの当事者の関与のあり方について、当事者からの発言を聞くことができたのは、大きな成果であった。

(2) については、6月に本学において「第三回アジア進歩的ソーシャルワークフォーラム」を開催した。フォーラムでは、カナダ・香港・マカオ・台湾・中国からの参加があり、新自由主義的グローバリズムの進

展による貧困問題の拡大や、地域を基盤とした支援のあり方について積極的な討論が展開された。また、本フォーラムの期間中、香港からの参加者からは「逃亡犯条例改正案」について問題点が説明され、民主主義の実現とソーシャルワークの関係についての議論があった。フォーラムの翌週から香港では大規模デモが展開されており、多数のソーシャルワーカーの関与があったと報告を受けた。我が国では社会運動へのソーシャルワーカーの参画は目立たない。今後は、具体的な福祉策だけでなく、民主化や平和運動などの社会運動へのソーシャルワークの参画も検討が必要となるだろう。

また、日本におけるソーシャルアクションの実態として、日本社会福祉学会で「ソーシャルアクションとしての「新・生存権裁判についての研究－原告団・支援団体の形成過程を通して」と題して報告を行った。また、本報告を踏まえて、大谷大学真宗総合研究所研究紀要に「新・生存権裁判」における原告団・支援団体の形成過程－ソーシャルアクションとしての「裁判」」としてまとめた。

個人研究

陽明学派の三教合一思想と皇帝の政治

研究代表者・元特別研究員　岩本 真利絵
（東洋史）

中国明王朝の創設者太祖朱元璋は三教合一思想（儒教・仏教・道教）を有していたが、明代中期以前の史料には儒者の影響により儒教的価値観の体現者として記述される。しかし、明代後期になると陽明学の影響を受けた思想家たちが太祖を三教合一思想の集大成として尊崇するようになる。太祖のイメージが儒教的価値観の体現者から三教合一思想の集大成に変容したという事象が何を原因とするのかについては解明されていない。本研究は陽明学派による太祖の文集『御製文集』出版事業について、出版の経緯、出版者たちの来歴と人脈、当時の政治状況を検討し、明代後期にどのような太祖のイメージが作られ、どのように三教合一思想と結びついていったのか、朝廷の政策とどのように連動していたのかを明らかにし、明代後期の三教合一思想の隆盛と同時代の皇帝の政治姿勢の関連性を実証することを目的とする。

2019年度は現存している『御製文集』各版本のうち、未見であった尊経閣文庫所蔵本と関西大学所蔵本の史料調査を行った。その結果、尊経閣文庫所蔵本は万暦二十五年頃に南京で出版された版本（南京本）であることが判明した。また、尊経閣文庫所蔵本と国立公文書館所蔵本（請求番号015-0014）を対照させた結果、南京本を翻刻して作られた版本であることを発見した。国立公文書館所蔵本の出版地や出版背景については、刻工名などを手掛かりに今後解明していく予定である。関西大学所蔵本については嘉靖十四年に揚州で出版された版本（揚州本）であることが判明した。

また、嘉靖八年に出版された『御製文集』雲南本の出版にかかわった劉臬・唐冑に関する史料収集を東洋文庫や国立国会図書館、中国国家図書館で行った。さらに、『御製文集』巻二〇所収「詠虹霓」詩について、諸版本の中で南京本とその翻刻である国立公文書館所蔵本のみに製作背景に関する注釈がつけられていることを発見した。「詠虹霓」詩の注釈に登場する彭友信という人物についての調査を湖南省図書館で行った。

個人研究

「文豪」夏目漱石像と岩波文化の研究：小林勇旧蔵『漱石全集』編纂関連資料を用いて

研究代表者・元特別研究員　服部 徹也
（日本近代文学）

2019年度は『漱石全集』編纂関連資料のうち、1935年に岩波書店より刊行されたいわゆる決定版『漱石全集』を中心に据えた。この決定版全集は小宮豊隆が実質的に監修者となり、岩波書店員による綿密な本文校訂が加えられたほか、各巻には小宮による作品解説が附され、全巻を横断的に検索することができる総索引が付属するという、『漱石全集』の歴史のなかでも記念すべき版である。その編纂過程を記録した文書を中心に撮影を行ない、翻刻を進めた。加えて、各巻解説をもとに漱石の総合的な伝記としてリライトした小宮豊隆の『夏目漱石』の初校ゲラの撮影を行なった。同書は、その後の漱石受容を方向付けたものとして大きな影響力を持ち、同書を批判的に言及することによって文芸批評家達は自らのスタンスを示してきた。その意味で、小宮豊隆がどのような点にこだわって加筆修正を行なっていたのかをゲラの書き込みから考察していくことは、同書による漱石像形成のバイアスを検討することに大きく役立つことであろう。

決定版全集には、新収録の逸文の発見者であり、図

版として「『漱石全集』月報」を彩る漱石関連物品（たとえば漱石作品が新派劇化された時の番付など）を収集した、鎌倉幸光というコレクターが大きな役割を果たしている。鎌倉は単にコレクターであるだけではなく、漱石の著作や漱石に関する著作の網羅的な目録作成を目指していた。数次にわたり発表された鎌倉による文献目録を入手・比較することで、漱石研究の最初期における書誌学的研究の成果としての意義を検討した。あわせて、不明な点の多かった鎌倉について伝記的調査を行ない、基礎的な情報を集めることができた。

以上のように『漱石全集』という広く流布した版本に注目し、漱石の没後受容を理解するうえでの基盤を整備したことにより、たとえば中国語訳の翻訳底本の同定につながるなど、応用的な研究成果を挙げることができた。

本研究の成果の一部を単著『はじまりの漱石――『文学論』の生成と初期創作の生成』（新曜社、2019）として刊行し、樋口一葉記念第28回やまなし文学賞（研究・評論部門）を受賞した。

個人研究

ハイデッガー「黒ノート」におけるユダヤ問題の研究――形而上学批判を基点として

研究代表者・元特別研究員　田鍋 良臣
（宗教哲学）

本研究の目的は、ハイデッガーの遺稿「黒ノート」に記されたユダヤ教に関する批判的な文言が、歴史的な背景をもった形而上学批判に属することを明らかにし、そこにユダヤ－キリスト教の信仰経験を擁護する積極的な可能性をさぐることである。令和元年度は、1930年代半ばから40年代初めにかけてなされたフィロンへの言及に依拠して、ハイデッガーのいわゆる存在史的思索におけるユダヤ教と形而上学との関係の解明に取り組んだ。その成果は、以下のように要約できる。

ハイデッガーは、プラトン哲学をユダヤ教の創造神話に結びつけた点にフィロン宗教哲学の歴史的な意義を見る。そこで注目されるのは、プラトンによって存在者の本質とみなされたイデアが、フィロンを通じて神の精神の内に移され「創造思想」となる点である。これは、被造物としての存在者という宗教的な規定が、哲学的に根拠づけられたことを意味する。さらにイデアは、時代の経過とともに、デカルトを通じて人間の精神の内に移動し、近代的な自我・主観が作り出す客観的な表象・観念となる。このようにイデアの所在は、神から人間へと歴史的に変遷していくが、存在者が他の存在者（神、人間）による「作り物」として、原因－結果連関のなかで説明されていることは一貫している。ハイデッガーは、こうした存在者のあり方を「作為性（Machenschaft）」と性格づけ、そこに存在忘却の本質をなす「存在棄却（Seinsverlassenheit）」、つまり「存在に立ち去られている」という存在史的な事態を見る。このことは、フィロンの宗教哲学によりユダヤ教と形而上学が結びつくことで、作為性としての存在棄却が歴史的に展開するための基盤が整備されたことを意味する。ここに、フィロンの宗教哲学がもつ存在史的な意義を求めることができるだろう（田鍋良臣「ハイデッガーにおけるユダヤ教と形而上学の問題」、日本宗教学会第78回学術大会、2019年9月、於帝京科学大学）。

個人研究

『四六文章図』研究－日本中世から近世における駢体の「読み書き」をめぐって－

研究代表者・特別研究員　上原 尉暢
（中国文学）

日本中世の漢文学を代表する五山文学は、漢詩文創作のみならず、中国の唐宋期の漢詩文を独自に出版し、またそれを研究する場を設け、またそれに関わる文章作法書の製作も行った。こうしたいわば「読み書きのシステム」を構築することで、近世における漢詩文隆盛の下地を用意したのだった。こうしたリテラシーの観点からも、五山文学が日本漢文学史上に果たした役割の大きさが近年注目されている。しかしながら従来の研究では、この時期の漢詩文の主流となった文体である散体（古体ともいう）の作品やその文章作法書ばかりが注目され、傍流になった駢体（四六文、四六駢儷文ともいう）については、質・量ともに閑却できないにも関わらず、十分な検討がなされてこなかった。

本研究が対象とする『四六文章図』は、江戸初期の円覚寺の僧大顛の編になるもので、中世以来の数々の駢体の文章作法書を集大成したとされているものである。この『四六文章図』を手がかりとして、五山文学における「駢体」の「読み書き」のあり方、すなわち

「駢体」の実態とその享受を有り様を明らかにすることが本研究の主たる目的である。

『四六文章図』を解明するためには、模範文例として引用される中国・日本の古典詩文の引用だけでなく、説明文に用いられる語についての出典を精査し、それを踏まえた上で詳細な訓読・語釈・通釈をつけた訳注を作成する必要がある。2019年度は「序文」及び「巻一　総説部分」までの訳注を完成させた。今後さらに一層吟味を加えて、その成果を学術雑誌に発表する予定である。さらに『四六文章図』と比較するための、日本の中世から近世の漢詩文の文章指南書・作法書の実態調査を行った。各種図書目録やウェブ上の検索を用いた調査とともに、さらに既存の研究資料に遺漏があることも考慮し、京都大学・東北大学などにも赴き調査を実施した。調査そのものはいまだ継続中であるが、将来中世から近世においての文章指南書・作法書のデータベースを構築し、それらとの比較検討することで、『四六文章図』の特徴や傾向がより明確になることが期待される。

個人研究

20世紀初頭の山西省における水利会社の設立の経緯とその後の展開

研究代表者・准教授　井黒 忍
（東洋史学）

本研究では、近代移行期の山西省北部において全国に先駆けて水利会社が設立された社会的・環境的背景を明らかにし、水利会社の水資源管理が地域社会と自然環境に与えた影響を明らかにすることを目的とした。研究方法としては、山西省全域における水資源の管理方式を類型化した上で、水利会社の組織と事業内容を検討し、地域社会における水資源管理方式、水利権、水環境の変化を考察する。

研究活動の一環として、2019年10月24日㈭から10月27日㈰にかけて台湾の国立成功大学（台南市）にて開催された第5回East Asian Environmental History 2019年大会に参加し、研究報告「The Establishment of Water Companies in Modern China（近代中国における水利公司の出現）」を行った。報告の概要は以下の通りである。

歴史的に見て、山西省北部は深刻な水不足のため農業開発が進まず、経済的に立ち遅れた地域となっていた。水供給の安定を実現し、生産性を維持・向上させるためには、灌漑の整備と水資源の管理が不可欠であった。20世紀初頭に、従来の村落や水利組織を中心とする水資源管理とは異なる新たな方式として、個人や銀行の資本投資によって設立された株式会社の形態を取る水利公司が出現する。

これら水利公司は全国的にはほとんど無名に等しい存在であったが、灌漑用水の供給を目的として治水および水利施設の建設を推し進めるだけでなく、施設完成後においても水路の維持・管理を継続して行うなど、当該地域の水資源開発に大きな役割を果たした。この水利公司の事業を通して、長らく開発が遅れた山西省北部における灌漑の整備と土地の改良が積極的に推し進められていったのである。しかしながら、1920年代以降、大株主が公司の事業への介入を強め、それぞれの持ち株数に応じて公司の土地を私有地として分割したため、企業としての実質は失われた。

なお、当初予定していた山西省での現地調査に関しては、新型コロナウィルス感染症の流行により、渡航が不可能となったため、計画を取りやめた。

個人研究

〈省察的実践〉と〈よりそう支援〉の親和性に着目した支援モデルの研究

研究代表者・講師　大原 ゆい
（社会学）

複雑化・複合化する現代の地域社会で生じる福祉問題は、従来の社会福祉制度や専門職制度の枠組みだけでは問題の所在や、解決のための道筋を見つけにくい状況にある。本研究のキーワードである〈よりそう支援〉とは、このような状況のもとで、福祉問題を抱える当事者とともに解決方法を考え、行動し、必要に応じて社会資源を作り出し、社会変革をも視野に入れた実践に取り組む福祉専門家による地域福祉実践のことである。本研究では、ドナルド・ショーン（1983）の提起する「省察的実践者」という専門家像を手がかりにして、〈よりそう支援〉が対象とする問題状況や場面、誰がどのような社会資源を用いて取り組んでいるのか、また従来の支援スタイルとの相違点などを明らかにした。

具体的には、問題を抱える家族が中心となって実践を始めた活動（認知症の人の見守り活動、独居高齢者の生活支援等）にかかわる福祉実践家を省察的実践者として捉え、インタビュー調査を通して〈よりそう支

援〉の構造分析を行った。今回インタビュー調査の対象とした実践家らは、いずれも家族に認知症の人がいたり、身近な地域で高齢者の徘徊による事故が発生しており、そのことが実践を始める契機となっているという、問題を抱える当事者性が強い実践家であった。また、個人で問題を抱えたときに、サポートしてくれる専門家や、同様の問題を抱えている人々に出会ったことが、実践を継続することにつながっているということもいずれの実践家にも共通している点でもあった。このようなインタビュー調査を通して、実践を後押しする専門家のもつ「専門知」だけでは解決しきれない問題がある一方で、家族を介護しているという経験が持つ「経験知」の重要性が明らかとなった。これらを踏まえて今後は、「専門知」と「経験知」がどのように相互浸透していくことができるのか、またそのことが支援のあり方に与える影響について考察をしていきたいと考える。

個人研究

19 世紀後半のドイツ語文学における「地方」と「ガリツィア」の表象の比較

研究代表者・講師　麻生 陽子
（ドイツ語文学・文化）

多元主義を掲げる現代のヨーロッパで注目されているのが、多様な民族や宗教、文化、言語などが混在したオーストリア・ハプスブルク帝国の周縁をなすガリツィア地方である。現在のポーランド南東部とウクライナ西部に位置するこの地方には、ポーランド人、ルテニア人（ウクライナ人）、ユダヤ人をはじめドイツ系、アルメニア系、ギリシャ系といった様々な民族が住み、ローマ=カトリック、ギリシャ=カトリック、ユダヤ教などの複数の宗教や言語、文化が混在していた。

1840 年代中葉以降ヨーロッパで流行した文芸ジャンル「村物語」において「地方」が前近代的な場所として美化されて描かれていくなか、ガリツィア地方は「貧困」「後進性」「多民族性」「多文化性」等の場所として文学的テーマを形成していった。異なる宗教や民族同士の緊張・対立が絶えず、他方で二度の世界大戦によってユダヤ文化等が奪われたトラウマ的記憶をもつとはいえ、この地方は、とくに 19 世紀後半以降、複数民族が調和的に共存する多様性をもつ場所として描かれている。ガリツィア地方は文化的豊饒さにたいする憧憬の投影先となるだけでなく、失われた記憶文化の痕跡を現にたどることのできる場所として、文学のみならず多くの分野で注目されている。

本研究は、この地方の文学的トポスの生成過程をたどりながら、19 世紀後半のドイツ語文学における「ガリツィア」および「地方」の表象について比較検討を行うものである。本年度は、チェコ語圏モラヴィア地方出身のドイツ語作家マリー・フォン・エーブナー=エッシェンバッハ（1830-1916）によってガリツィアの民族問題が集約的に表現された文学作品について論じた。19 世紀前半に起きたオーストリアにたいする蜂起が題材とされた彼女の作品では、権力のはざまで翻弄される農民やユダヤ人の曖昧な帰属意識が描かれている。多民族国家ハプスブルク帝国の縮図であるガリツィアという周縁の地方を描いたオーストリアの「村物語」は、ナショナリズムが高揚する 19 世紀後半という時代を批判的に映し出す視線としての役割を担うものなのである。

個人研究

田辺哲学の中期から後期への発展の解明－武内義範との交流を踏まえて

研究代表者・任期制助教　浦井 聡
（宗教哲学）

田辺元（1885-1962 年）は西田幾多郎（1870-1945 年）の後継者であり、西田と共にいわゆる「京都学派」の礎を築いたとされる哲学者である。田辺の哲学は「種の論理」（1934-41 年）や「懺悔道」（1944-53 年）、「死の哲学」（1953-62 年）などの名を与えられた哲学的立場によって知られている。

本研究は、田辺哲学研究の中でほとんど顧みられてこなかった《沈黙期》（1941-44 年）に光を当てるものである。田辺は 1934 年から国家と個人の関係を論じた「種の論理」の理論的構築に着手するが、1941 年に一切の著作の発表を止めて《沈黙期》に入る。この哲学的挫折のあと、田辺は 1945 年に京都を離れるまで、弟子の武内義範（1913-2002 年）を介して親鸞や曽我量深（1875-1971 年）の著作に対する理解を深めていた。このことが 1944 年 11 月の京都帝国大学での講演「懺悔道－Metanoetik－」や『懺悔道としての哲学』（1946 年）における哲学的復活の跳躍板の役割を果たす。この《沈黙期》における田辺哲学の深化の解明が、本研究の目的である。

この目的の達成のために、本研究は《沈黙期》前後の著作の読解と並行して、未公刊資料の翻刻と公開を行う。具体的に言えば、ひとつは田辺の手帳、もうひとつは武内義範との往復書簡である。田辺は《沈黙期》の思索の過程を手帳や武内義範宛書簡の中で記している。したがって、田辺の手帳および田辺・武内往復書簡の翻刻を行うことで《沈黙期》の田辺の思索の深化を実証的に解明できる。このことによって、今まで分断的に理解されてきた「種の論理」と『懺悔道としての哲学』以降の宗教哲学との連続性と差異を精緻に解明することができ、ひいては1934年以降死没する1962年までの田辺哲学を統合的に理解することに大きく貢献することができる。

本研究は2019年度までに、武内義範への田辺の書簡の半数と、田辺の手帳１冊（1943年１月から８月までのもの）の翻刻を行った。2020年度は田辺の手帳２冊の翻刻（1943年９月から1944年５月までのもの）及び一次翻刻済資料の二次翻刻と校正を進め、2021年度内の公開を目指す。

個人研究

中世前期の飛鳥井家における顕昭の著作の受容の研究

研究代表者・任期制助教　鎌田 智恵
（日本古典文学）

中世歌壇を代表する歌道家の一つである六条藤家の代表的な人物に、顕昭（1130頃－1210以降）がいる。顕昭は歌集や歌語の注釈において合理的・実証的な考証に取り組み、その成果は中世以来、高く評価されてきた。しかし、歌学史におけるその重要性に反して、彼の歌学の後代的受容の実態にはいまだ明らかでない点が残っている。本研究は、中世の歌道家・飛鳥井家の活動を対象に、鎌倉時代から室町前期にかけての顕昭著作の受容の実態を解明することを目指している。

本年度は、主に以下の２つの調査研究に取り組んだ。

1. 顕昭著書の伝来経路の整理

伝本の奥書の記述を中心に、顕昭の著作がどのような人々によって書写され伝わってきたかを著作毎に調査し、整理した。閲覧が容易でない伝本はひとまず先行研究の調査結果に従い、その他の伝本は可能な限り原本やマイクロフィルム資料・紙焼写真を閲覧のうえ調査した。要調査資料点数が多いため一部未了であるが、おおよその伝来経路が整理できた。

2. 鎌倉時代～室町前期における飛鳥井家の歌学的活動の調査

顕昭著作の多くを書写したことで知られる雅有（1241-1301）と、同じく顕昭の著作を書写した雅縁（1358-1428）の２人を中心に、この間の飛鳥井家における顕昭著作の書写状況を調査した。また補足的に、近世に飛鳥井家の伝来資料を整理・収集した雅威（?-1810）の事蹟調査も行った。

なお上記調査研究のため、国文学研究資料館を訪問した（２月17～21日）。

一般研究

仏教講釈文献の利用と説話の発展に関する写本学的研究 －敦煌文献を中心に－

研究代表者・任期制助教　髙井 龍
（敦煌学）

研究代表者は、中国における仏教講釈や僧侶の講義においていかに仏教説話が利用されたのかを、敦煌文献を主たる研究資料として解明する研究を進めている。2019年度は、敦煌文献中に４点の写本（P.2191V、P.2344V、P.3784V、P.3815）を残す祇園精舎建立説話を取り上げ、それぞれの筆や紙とともに、書写時における空白の残し方や書き換えなどの側面にも着目することによって、９世紀敦煌の僧侶がいかに祇園精舎建立説話を利用したかを解明する研究を進め、該故事の多様なあり方とその幅広い受容を明らかにした。また、祇園精舎建立説話と同系故事である敦煌文献中の「降魔変文」との比較考察の結果、９世紀敦煌に流布した祇園精舎建立説話が比較的経典に準じた内容であるのに対し、「降魔変文」が強い虚構性を備えた故事へと発展していること、及び「降魔変文」が他の10世紀仏教講釈文献や仏教文学文献に通じる特徴であることを明らかにするとともに、10世紀には、祇園精舎建立説話のような経典に近しい内容の故事の受容が徐々に衰退していったことを指摘した。なお、経典的性格を強く持つ祇園精舎建立説話と虚構性の強い「降魔変文」との相違は、日本の中世期に残された仏教説話からも類似した状況が確認される。特に、虚構性を強く押し出す後者の如き故事が一部独立した形で展開していた状況からは、東アジアの広い地域に受容されながらも、その発展のあり方に一定の類似した側面があったことを推測させるものである。

祇園精舎建立説話は、『維摩詰所説経』の講経や講

義において利用されることの多い説話であった。次年度の研究としては、該故事と密接な関係にあり、また10世紀敦煌において最も受容のあった講経文である「維摩詰所説経講経文（擬）」から、仏教の説話の利用と講経の関係を写本研究によって浮かび上がらせる予定である。

2019(令和元)年度　東京分室 PD 研究員個人研究成果報告

個人研究

第一次世界大戦前後のフランス政治思想とキリスト教――極右思想家とジッドの関係に注目して――

研究代表者･元東京分室 PD 研究員　西村 晶絵
（フランス文学）

本研究は、19 世紀末から 20 世紀半ばに執筆活動を行ったプロテスタントの知識人アンドレ・ジッドと、1894 年のドレフュス事件を契機に誕生した国粋主義の政治思想団体アクシオン・フランセーズ（以下 AF）の間に見られた接近と離反の動きを明らかにしようとするものである。

2019 年度は、AF の中心的な論客であったシャルル・モーラスとジッドに焦点を当て、両者の関係性や政治思想の特徴を、各々の宗教思想と文学的立場を踏まえて分析することを試みた。モーラスは、ドイツからもたらされた宗教としてプロテスタントを批判し、カトリック教会こそがフランス固有の宗教であると論じ、擁護することで、多くの聖職者・信者からの支持を取り付け、AF の組織拡大を図った。にもかかわらず、なぜジッドはモーラスへ接近し、両者は友好な関係を築こうと試みたのか。この問いを解き明かすことが主な狙いである。

両者の接近の背景には、ジッドの「プロテスタント」解釈の独自性を指摘できた。さらにジッドには、批評家モーラスに支えられた文芸批評運動としての AF へのシンパシーが認められた。当時の AF は、「科学に対する文学的大義を支持し、ラディカルな共和主義者の破壊的な力に対する祖国フランスの大義を支持した唯一の政治的運動」であり、文化的影響力は無視できないものだったからである。だが、ジッドのモーラスからの離反もまた、結果的として文学上の立場の不一致によって引き起こされている。モーラスもジッドも、ともに「古典主義」を称揚したが、両者の「古典主義」の捉え方は正反対のものであることが指摘できるからである。宗教・文学それぞれにおいて、規律を重視したモーラスと、権威や規律よりも個の発露を重視したジッドの宗教・文学を巡る立場の相違が、それが政治思想の懸隔となって現れる様を明示した。

なお、本研究を遂行するにあたり、12 月末から 1 月初めにかけてフランス・パリで資料収集を行った。また、上記の研究成果は、『真宗総合研究所紀要』第 38 号への投稿論文としてまとめた。今後は、AF に関わる他のキリスト教の作家・思想家の政治的立場についても検討し、さらなる研究内容の発展に努めたい。

個人研究

近代日本の大衆文化における教祖像の研究

研究代表者･東京分室 PD 研究員　大澤 絢子
（宗教学・近代宗教文学）

本研究では、近代以降の歴史研究でなされてきた教祖の史実検証に関する言説と、教祖を題材とした近代文学の記述の分析を通して近代歴史研究と文学の相互関係を考察し、近代日本における教祖像の形成プロセスを解明することを目的としている。

2019 年度は、書籍・雑誌・新聞など近代出版メディアにおける親鸞（1173～1262/1263）のイメージの形成過程を中心に検証を行った。研究の遂行にあたり、大谷大学、龍谷大学、同志社大学等で資料収集、調査を行い、国内学会、国際学会にて各 1 回研究報告を行った。近代仏教や日本史・国文学研究の研究会にも参加して計 2 回報告し、ゲスト・スピーカーとして、日本学研究会第一回学術大会シンポジウム（「文学におけるジェンダーと宗教」於：東北大学）でも報告した。研究成果の一部は、本年度刊行の単著『親鸞「六つの顔」はなぜ生まれたのか』（2019 年、筑摩書房）にてまとめ、森覚編『メディアのなかの宗教――近現代の仏教的人間像』（2020 年、勉誠出版）にも執筆者として加わった。

今年度焦点を当てたのは、親鸞と恵信尼の夫婦イメージの形成過程である。本研究では、恵信尼文書発見の 1921 年以降の歴史研究と文学作品それぞれの言説の傾向を年代ごとに分析し、歴史研究の分野で一夫一婦制や夫婦同居、夫を支える妻といった近代的な家族観・ジェンダー観が重ねられた恵信尼像が大きく打ち出され、それを受けて文学においても同様の恵信尼像が定着してきたプロセスを明らかにした。寺院出身

の研究者が自分たちのなかにある、夫・父（住職）を支える妻・母（坊守）のイメージを親鸞と恵信尼の夫婦に投影し、それが教団内の共通の価値観として住職と坊守の関係に転用されてきた可能性もあり、中世を生きた親鸞夫婦のイメージが、現代の住職－坊守夫婦像へ及ぼしてきた影響は少なくないと考えられる。

この成果は、2021年3月刊行の『学際日本研究』創刊号に掲載予定であり、坊守の問題に関連しては、2020年度における東京分室の共同研究（「女性と仏教」）にも接続させ、2020年10月には公開シンポジウム（「日本仏教を生きる女性たち」）も開催した。

個人研究

坂東本『教行信証』の訓点研究

研究代表者･東京分室 PD 研究員　青柳 英司
（真宗学）

親鸞（1173-1262）の主著とされる『顕浄土真実教行証文類』（以下『教行信証』）には、坂東本と呼ばれる真筆本が現存している。本書の文献学的研究としては、重見一行『教行信証の研究』（法藏館、1981）、鳥越正道『最終稿本教行信証の復元研究』（法藏館、1997）などがあり、成立過程や筆跡について詳細な研究が実施されている。

ただ、上記の研究は坂東本の漢字部分を中心にしたものであり、訓点部分に関する研究は必ずしも十分ではない。そこで筆者は、金子彰氏（東京女子大学名誉教授）、菊池弘宣氏（親鸞仏教センター嘱託研究員）らと共に坂東本の訓点を網羅的に収集して索引を作り、本年度は特に、異筆訓点の究明に向けた研究を試みた。

親鸞が生きた時代は、日本語の字音が移り変わる過渡期に当たる。そのため、親鸞著作の仮名の表記にも、歴史的仮名遣いを逸脱した例が少なくない。ただ、そこには親鸞独自の規範が見られ、特に「ヲ」の仮名遣いには、非常に顕著な特徴が認められる。具体的には、親鸞は「をば」「をや」「をも」「をか」を基本的に、「オハ」「オヤ」「オモ」「オカ」と表記していることが知られている。また、二音以上から成る単語の語頭は、歴史的仮名遣いが「ヲ」であっても、基本的に「オ」と表記されている。

しかしながら坂東本の中には、語頭が「ヲ」となっている二音以上の単語が、十二例だけ確認された。しかも十箇所が「行巻」の付訓であり、そのうち七箇所は朱筆であった。これらが単なる誤記であるなら、親鸞は「行巻」で朱筆を持った場合に限り、集中的に誤記をしたことになる。この想定は、明らかに不自然である。そのためこれらの訓点は、異筆の可能性を考慮する必要があるだろう。

さらに、これら十二箇所の訓点表記と、『教行信証』の古写本である高田本、西本願寺本の訓点表記とを比較すると、両本とも全て語頭が「オ」に修正されていることが判明した。この点も、十二箇所の表記が異筆である可能性を、間接的に支持するものと言えるだろう。

以上の点から、坂東本の訓点を無条件に親鸞の筆とすることは、危険であることが明らかとなった。筆者はこの成果を、日本印度学仏教学会第71回学術大会で発表し、また同学会の機関紙に論文として投稿した。

個人研究

「孝」思想に基づく終末期医療の法と倫理
－儒教文化圏における「善終」の実践と意思決定制度の変遷－

研究代表者･東京分室 PD 研究員　鍾 宜錚
（生命倫理学）

本研究は、日本、韓国、台湾、香港など儒教文化圏における「孝」思想の実践に注目し、「孝」の概念の受容と終末期医療方針への影響を検討することで、家族関係および「孝」を前提とした倫理原則と意思決定の進め方を考察するものである。研究方法は文献調査および実際臨床現場にいる医療関係者たちへのインタビュー調査である。2019年度は、同年1月に施行開始した台湾の「患者自主権利法」に規定された終末期医療における意思決定に関する家族の役割と責務の変化について調査した。また、同法は従来の民法で描かれた「孝」の概念と衝突する可能性と、核家族が中心となった現代社会における「孝」の実践の変化に伴って終末期医療のあり方に対する見方に変化も生じてくることについて、「終末期医療の法制化とその文化的意義－台湾における親孝行とアドバンス・ケア・プランニングの家族参加」を題に、8月に早稲田大学にて開催された第25回世界医事法会議で報告した。

また、2020年2月、「患者自主権利法」が施行してから1周年になった節目に、台湾におけるアドバン

ス・ケア・プランニング（Advance Care Planning、以下、ACP）の推進にもっとも成果を上げている台北市立連合病院を訪問した。同院で開催される ACP の法と倫理に関する日台交流セミナーに参加し、日本と台湾における終末期医療の法制化と ACP 制度の違いを報告した。これに加えて、台湾におけるスピリチャルケアやグリーフケアの実践状況を知るために、台北市にある「大悲学苑」を訪問した。同学苑の活動範囲は台北市と新北市に限定されているものの、法師と育成したボランティアが地域で暮らす患者とその家族を支え、早い段階から死や死にゆくことについて考えるように様々なサポートを提供している。日本にも近年終末期におけるスピリチュアルケアを取り組む団体や施設が増加しており、その重要性も指摘されている。日台におけるスピリチュアルケアの取り組みと宗教者の役割は今後の課題としてさらに研究する必要がある。

2020（令和 2）年度東京分室 PD 研究員個人研究紹介

現代における在日コリアンのキリスト教信仰に関する研究 －1960 年代以降の韓国社会の宗教変動に注目して－

研究代表者・東京分室 PD 研究員　荻 翔一
（宗教社会学）

朝鮮半島から渡日してきた人々とその子孫で構成される在日コリアンは、戦前から戦後にかけて日本各地に同胞のための教会を設立した。それらは「民族の教会」として、母国の言語や文化を維持・継承する拠点となってきた。母国を離れた在日コリアン一世は教会を通じて同胞の共同体を形成し、日本で生まれ育った二世はそこでエスニック・アイデンティティを獲得してきたとされる（中西 2007）。

他方で、現代における在日コリアンのキリスト教信仰を捉えるうえで、韓国社会の宗教変動の影響を無視することはできない。1960 年代以降、韓国ではキリスト教が急成長し、現在では 4 人に 1 人がクリスチャンとなるまでにその教勢を伸ばしてきた。1990 年代以降は海外布教が活発化し、「民族の教会」の大半はニューカマーの韓国人牧師が赴任している。また近年来日した韓国人の一部も教会に加わり、オールドカマーである在日コリアンがマイノリティとなっている教会も珍しくない。

これまでの調査によれば、ニューカマーの韓国人の教会参与に不安を感じたり、反発したりする在日コリアンは少なくない。だが現状では韓国人牧師・信者との接触はもはや日常的なものとなり、彼／彼女らなしでは教会の円滑な運営ができないほどの影響力を持っている。

そこで本研究は、先行研究で看過されてきた上記現象に注目し、在日コリアンがキリスト教を信仰するうえで、教会内の韓国人牧師・信者が果たしてきた機能・役割を明らかにすることを目的とする。そのことを通して、韓国社会の宗教変動が、現代に生きる在日コリアンのキリスト教信仰に与えた影響を考察する。具体的には、以下の課題に取り組む。

①韓国人牧師・信者到来以前の在日コリアンのキリスト教信仰の特徴は何だったのか
②韓国人牧師・信者が「民族の教会」に参与したことによって、在日コリアンのキリスト教信仰を取り巻く環境はいかに変化したのか
③教会内の韓国人牧師・信者との相互行為を通じて、在日コリアンが自身の信仰をどのように捉え直し、位置づけるようになったのか

公開講演会・公開研究会

東京分室「宗教と社会」研究会報告

東京分室指定研究・研究員　鍾 宜錚
（生命倫理学）

本指定研究では、現代社会における苦のあり方を通して仏教と生命倫理の関係性を解明するために、生命倫理研究者であり、浄土真宗本願寺派の僧侶でもある寿台順誠氏（箕輪山　光西寺住職）を報告者として招聘し、2020年7月6日㈪にZoomによるオンライン研究会を開催した。仏教では、生老病死を根本的な苦として捉えられていることに対し、現代社会の疾病構造が「急性病・感染症から慢性病・生活習慣病へ」と変化するなかで仏教がどうかかわるべきかに関する寿台氏の研究から、現代社会の価値観と宗教との関係性を検討する。寿台氏の報告「現代の生老病死－引き延ばされる老病死と操作される生－」の概要は以下の通りである。

本報告では、現代の老苦・病苦・死苦の特徴に関する考察に加え、生殖補助技術および出生前診断の進歩に伴って生じた命の操作の問題を検討する。日本は2007年に65歳以上の人が総人口の21％を超えており、超高齢社会に突入した。高齢化が進むとともに、認知症患者の増加が予想されており、さらに医療技術の進歩により「死にたくても死ぬに死ねない状態が長く続く新たな苦も生じてしまった。これに対し、認知症を病気であることを理解しつつも、人間の自然の経過のあらわれとして受け入れる必要がある。認知症を「治す」ものではなく、認知症患者の人間としての尊厳をいかに回復すべきかに重点を置いてケアを行うことが重要だとされている。

次に、現代社会における疾病構造が結核・肺炎などの感染症・急性病からがん・心臓病などの生活習慣病・慢性病へと移行したことで、病気と付き合わねばならない時間が長くなる新たな「苦」が生じてしまう。また、かつては病気や障害とみなされなかった現象が医療の対象と認定される、いわゆる医療化されることによって、新たな病が生み出される苦も生じている。これに対し、脱医療化への動きと、がん治療をはじめ行き過ぎた医療に関する医療者内部からの問題提起がみられている。

そして現代の死苦について、家族など親密な関係をもつ人、お任せできる人が少なくなっているなかで、安心できる故郷や所属団体、極楽浄土のような頼りになる世界の存在への信頼性も失い、自分では決定できないことまで自己決定すべきだという強迫観念に苛まれる新たな苦が生じてしまう。「終活」の言葉がマスコミに頻繁に登場するのも、少子高齢化が進む中で、周囲に迷惑をかけずに人生の終焉を決めていきたいと思う人が増加していることにあると考えられる。「自分らしい死」を求める終活の背後には、人の死を商品化し、死の本質への探究を疎かにする問題がみられる。これに対し、「臨終まつことなし、來迎たのむことなし。信心の定まるとき往生また定まるなり。」という浄土真宗の教えはいかに対応すべきかという新たな課題が生じる。

最後に、現代の生苦は、優生思想に基づいて生が操作されることによって未来が奪われる苦に表している。障害のある子どもは生まれてこなかったほうが良かったと思わされることによって生じた苦と、それを回避するために中絶の権利や出生前診断を受ける権利を求める動きが見られる。障害児が生まれた場合に親が不当出生（wrongful birth）として医師を訴え損害賠償を求める裁判はその代表例である。

このように、現代社会における生老病死の実態の変化とその課題を生命倫理と仏教の観点から再考することによって、「苦」という既成概念にとらわれず、現代の生老病死の積極的な側面とその意義を見出す可能性が導かれることになるだろう。

オンライン開催時の様子

真宗総合研究所彙報　2020. 4. 1 ～ 2020. 9. 30

■研究所関係

◎研究所委員会

◇2020 年 5 月 27 日㈬12 : 20～6 月 5 日㈮
（サイボウズ上で書面会議）

1．特別研究員の人事について
2．2020 年度研究組織について
3．私立大学研究ブランディング事業実施状況について
4．学外者への OUNET アカウント発行について

◇2020 年 6 月 19 日㈮～6 月 26 日㈮
（サイボウズ上で書面会議）

1．東京分室 PD 研究員公募について
2．報告事項

◇2020 年 8 月 27 日㈭14 : 40～16 : 10（博綜館第5会議室）

1．東京分室 PD 研究員の採用について
2．2020 年度「一般研究（福田班）」の廃止について
3．2020 年度研究組織について
4．その他

◎研究ブランディング事業ワーキングチーム会議

◇2020 年 6 月 17 日㈬～6 月 23 日㈫
（サイボウズ上で書面会議）

1．私立大学等研究ブランディング事業　成果報告書について

E ラーニングを活用した「仏教・真宗」教育活動の展開

【ミーティング】

日　時　4 月 15 日㈬13 : 00～14 : 00
出席者　木越康　酒井恵光　戸次顕彰
場　所　真宗総合研究所内　研究班のデスク
内　容　2020 年度研究計画の確認とデスク・機材等の確認

日　時　4 月 22 日㈬16 : 30～18 : 00
出席者　木越康　酒井恵光　一楽真　箕浦暁雄　戸次顕彰　松下俊英　難波教行
場　所　オンラインのビデオ会議
内　容　全体の初回顔合わせと 2020 年度の研究計画の確認など

日　時　5 月 8 日㈮13 : 00～14 : 30
出席者　木越康　酒井恵光　一楽真　箕浦暁雄　戸次顕彰　松下俊英　難波教行
場　所　オンラインのビデオ会議
内　容　研究業務の役割分担と今後の予定の確認など

日　時　5 月 22 日㈮15 : 00～16 : 00
出席者　木越康　一楽真　箕浦暁雄　戸次顕彰　松下俊英　難波教行
場　所　オンラインのビデオ会議
内　容　主に「仏教入門」試作版作成に向けた話し合い

日　時　6 月 18 日㈭14 : 40～15 : 40
出席者　木越康　一楽真　箕浦暁雄　松下俊英　難波教行
場　所　オンラインのビデオ会議
内　容　各自の進捗状況の報告と今後の方針の確認等

日　時　7 月 2 日㈭13 : 00～14 : 30
出席者　木越康　酒井恵光　一楽真　箕浦暁雄　戸次顕彰　松下俊英　難波教行
場　所　オンラインのビデオ会議
内　容　各自の進捗状況の報告と「仏教入門」試作版作成に向けた方向性の確認など

日　時　7 月 13 日㈪16 : 00～18 : 00
出席者　箕浦暁雄　戸次顕彰　松下俊英
場　所　真宗総合研究所ミーティングルーム
内　容　「仏教入門」試作版作成に関する打ち合わせと試験撮影

日　時　7 月 17 日㈮15 : 00～16 : 30
出席者　木越康　酒井恵光　一楽真　箕浦暁雄　戸次顕彰　松下俊英　難波教行
場　所　オンラインのビデオ会議
内　容　運用面に関する意見交換など

日　時　7 月 29 日㈬13 : 30～15 : 30
出席者　木越康　酒井恵光　一楽真　戸次顕彰　松下俊英　難波教行
場　所　真宗総合研究所ミーティングルーム

内　容　響流館のスタジオ見学ならびに機材確認の後、「仏教入門」のコンテンツ作成のための議論・意見交換など

日　時　8 月 26 日㈬16：00～18：00
出席者　木越康　酒井恵光　一楽真　箕浦暁雄　戸次顕彰　松下俊英　難波教行
場　所　真宗総合研究所ミーティングルーム（2 名、オンラインでの参加）
内　容　「仏教入門」講義配信に向けた内容原稿の確認と意見交換

国際仏教研究

◇2020 年 7 月 16 日㈭4 限　2020 年度研究活動打ち合わせ
於：真宗総合研究所内　ミーティングルーム（響流館 4 階）
参加者：井上尚実、松浦典弘、箕浦暁雄、Michael J. Conway、鶴留正智、千葉一生

清沢満之研究

【ミーティング】

◇第 1 回
日　時：2020 年 4 月 2 日㈭16：30～18：00
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興、澤﨑瑞央
会　場：オンライン
目　的：読み合わせ方法の検討

◇第 2 回
日　時：2020 年 5 月 1 日㈮13：00～14：30
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興、澤﨑瑞央
会　場：オンライン
目　的：全体会議開催の確認

◇第 3 回
日　時：2020 年 5 月 7 日㈭11：00～12：30
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興、澤﨑瑞央
会　場：オンライン
目　的：読み合わせ検討事項の確認

◇第 4 回
日　時：2020 年 5 月 18 日㈪14：00～15：30
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興、澤﨑瑞央
会　場：オンライン
目　的：読み合わせ検討事項の確認

◇第 5 回
日　時：2020 年 5 月 25 日㈪14：00～15：30
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興、澤﨑瑞央
会　場：オンライン
目　的：読み合わせ検討事項の確認

◇第 6 回
日　時：2020 年 6 月 1 日㈪14：00～15：30
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興、澤﨑瑞央
会　場：オンライン
目　的：読み合わせ検討事項確認

◇第 7 回
日　時：2020 年 6 月 8 日㈪14：00～15：30
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興、澤﨑瑞央
会　場：真宗総合研究所編集室（オンライン）
目　的：読み合わせの検討事項確認

◇第 8 回
日　時：2020 年 6 月 15 日㈪14：00～15：30
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興、澤﨑瑞央
会　場：真宗総合研究所編集室（オンライン）
目　的：読み合わせの検討事項確認

◇第 9 回
日　時：2020 年 6 月 22 日㈪14：00～15：30
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興、澤﨑瑞央
会　場：真宗総合研究所編集室（オンライン）
目　的：読み合わせの検討事項確認

◇第 10 回
日　時：2020 年 7 月 3 日㈮11：00～12：30
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興、澤﨑瑞央
会　場：真宗総合研究所編集室（オンライン）
目　的：読み合わせの検討事項確認

◇第 11 回
日　時：2020 年 7 月 7 日㈫16：00～17：30
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興、澤﨑瑞央
会　場：真宗総合研究所編集室（オンライン）
目　的：読み合わせの検討事項確認

◇第 12 回
日　時：2020 年 7 月 20 日㈪14：00～15：30
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興、澤﨑瑞央
会　場：真宗総合研究所編集室（オンライン）
目　的：読み合わせの検討事項確認

◇第 13 回
日　時：2020 年 7 月 27 日㈪14：00～15：30
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興、澤﨑瑞央
会　場：真宗総合研究所編集室（オンライン）
目　的：読み合わせの検討事項確認

◇第 14 回
日　時：2020 年 8 月 3 日㈪16：00～17：30
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興、澤﨑瑞央
会　場：真宗総合研究所編集室（オンライン）
目　的：読み合わせスケジュール確認

◇第 15 回
日　時：2020 年 8 月 19 日㈬13：00～14：30
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興、澤﨑瑞央
会　場：真宗総合研究所編集室（オンライン）
目　的：別巻Ⅱ原稿の作成

◇第 16 回
日　時：2020 年 8 月 24 日㈪14：00～15：30
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興、澤﨑瑞央
会　場：真宗総合研究所編集室
目　的：別巻Ⅱ原稿の作成

◇第 17 回
日　時：2020 年 8 月 28 日㈮13：00～16：30
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興、澤﨑瑞央
会　場：真宗総合研究所編集室
目　的：別巻Ⅱ原稿の作成

◇第 18 回
日　時：2020 年 8 月 31 日㈪13：00～14：30
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興
会　場：真宗総合研究所編集室
目　的：別巻Ⅱ原稿の作成

◇第 19 回
日　時：2020 年 9 月 4 日㈮13：00～14：30
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興、澤﨑瑞央
会　場：真宗総合研究所編集室
目　的：別巻Ⅱ入稿原稿の検討

◇第 20 回
日　時：2020 年 9 月 9 日㈬13：00～14：30
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興、澤﨑瑞央
会　場：真宗総合研究所編集室
目　的：別巻Ⅱ入稿原稿の検討

◇第 21 回
日　時：2020 年 9 月 10 日㈭17：00～18：30
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興、澤﨑瑞央
会　場：真宗総合研究所編集室
目　的：別巻Ⅱ入稿検討事項の確認

◇第 22 回
日　時：2020 年 9 月 11 日㈮13：00～14：30
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興、澤﨑瑞央
会　場：真宗総合研究所編集室
目　的：別巻Ⅱ入稿検討事項の確認

◇第 23 回
日　時：2020 年 9 月 16 日㈬10：00～12：00
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興、澤﨑瑞央
会　場：真宗総合研究所編集室
目　的：別巻Ⅱ入稿検討事項の確認

◇第 24 回
日　時：2020 年 9 月 18 日㈮13：00～14：30
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興、澤﨑瑞央
会　場：真宗総合研究所編集室
目　的：別巻Ⅱ入稿検討事項の確認

◇第 25 回
日　時：2020 年 9 月 25 日㈮13：00～14：30
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興、澤﨑瑞央
会　場：真宗総合研究所編集室
目　的：別巻Ⅱ入稿検討事項の確認

※この間、当班構成員を三班に分け、各班週一回を目処に別巻Ⅱ収録予定資料の読み合わせを行なった。

【全体会議】
◇第 1 回
日　時：2020 年 5 月 13 日㈬16：20～17：50
出席者：西本祐攝、大艸啓、一楽真、加来雄之、藤原正寿、福島栄寿、西尾浩二、浦井聡、藤井了興、澤﨑瑞央
会　場：オンライン
目　的：清沢班作業全体の進捗状況報告
研究計画、読み合わせ班の再編

大谷大学史資料室
【展示活動】
◇図書館エントランス展示スペースにて「大谷大学～in 東京～」の展示準備

2020 年 7 月 20 日㈪17：00～18：00（展示期間：2020. 9. 1～2020. 10. 30）
◇図書館エントランス展示スペースにて「大谷大学～in 東京～」の展示撤収
2020 年 10 月 30 日㈮13：00～13：10

上記の活動以外にも、大谷大学史資料室では大学史資料の調査・整理や、貸出等への対応を日常業務として行った。また、展示作業に際しては、大谷大学博物館からの協力を得た。ここに謝意を記す。

【ミーティング・資料確認・整理作業】
◇第 1 回
日　時：2020 年 6 月 19 日㈮10：00～12：00
出席者：ダシュ ショバ ラニ、松岡智美、箕浦るみ子、岩崎千尋
会　場：真宗総合研究所フリースペース
目　的：大学史資料室の現状と課題

◇第 2 回
日　時：2020 年 7 月 3 日㈮10：00～12：00
出席者：ダシュ ショバ ラニ、松岡智美、箕浦るみ子、岩崎千尋
会　場：真宗総合研究所フリースペース
目　的：東京都公文書館に提出する「掲載・放映等届」の確認作業

◇第 3 回
日　時：2020 年 7 月 10 日㈮10：00～12：00
出席者：ダシュ ショバ ラニ、松岡智美、箕浦るみ子、岩崎千尋
会　場：真宗総合研究所フリースペース
目　的：図書館エントランススポット展示について

◇第 4 回
日　時：2020 年 7 月 12 日㈮10：00～12：00
出席者：ダシュ ショバ ラニ、松岡智美、箕浦るみ子、岩崎千尋
会　場：真宗総合研究所フリースペース
目　的：資料確認作業

◇第 5 回
日　時：2020 年 8 月 26 日㈬16：00～17：30
出席者：ダシュ ショバ ラニ、箕浦るみ子、岩崎千尋
会　場：真宗総合研究所フリースペース
目　的：大学史資料室所蔵写真整理について

■デジタルアーカイブ資料室
［ミーティング］
◇第 1 回
日　時：2020 年 6 月 22 日㈪16：30～18：00
出席者：ダシュ　ショバ　ラニ、清水洋平
会　場：真宗総合研究所フリースペース
目　的：「大谷貝葉目」のこれまでの作業確認
◇第 2 回
日　時：2020 年 7 月 29 日㈬13：00～15：00
出席者：ダシュ　ショバ　ラニ、清水洋平、舟橋智也
会　場：真宗総合研究所フリースペース
目　的：「大谷貝葉目」の今後の課題、作業内容確認
◇第 3 回
日　時：2020 年 9 月 8 日㈫15：30～17：30
出席者：ダシュ　ショバ　ラニ、清水洋平
会　場：真宗総合研究所フリースペース
目　的：すでに抽出された稀覯文献の整理

■東京分室
【研究会】
◇2020 年 7 月 6 日㈪14：00～16：30
（オンライン）
講師：寿台順誠氏（浄土真宗本願寺派光西寺住職）
テーマ：「現代の生老病死－引き延ばされる老病死と操作される生－」

■EBS
◇EBS 公開セミナー　録画
5 月 22 日㈮ 4 限目
6 月 19 日㈮ 4 限目
7 月 23 日㈭ 4 限目
9 月 28 日㈪ 4 限目
講師：Michael J. Conway
場所：響流館 3 階　演習室 1

■人事

■東京分室 PD 研究員
□新規採用（2020 年 10 月 1 日付）
＊荻　翔一

研　究　所　報　第 77 号

2021 年 3 月 1 日　発行
編集発行　大谷大学真宗総合研究所
〒603-8143 京都市北区小山上総町
Tel. 075-411-8498 Fax. 075-411-8435
Email. kenkyusyo@sec.otani.ac.jp

©2021 Otani University Shin Buddhist Comprehensive Research Institute